

土藏の頂上に馬乗りになつて、建物を揺がせた男があると言つて、私は其記念の土藏を指さし示された。しかもつい二十年ばかり前の出来事と謂つたにも拘らず、我々信仰を共にせざる者の眼には、傳説としてより他は受取る事が出来なかつたのである。岡山縣久米郡岩間の本山寺、大塚和の兩山寺等には、境内に護法社があり、又護法石・護法松等があつて、毎年七月の法會の日、護法實（ゴホウザネ）といふ者が託宣を爲し又恠力を現はした口碑を傳へて居る。此護法實も亦只の村の若者であつた。祈禱精誠を凝らすと忽ち靈が宿つて不思議を示し、殊に穢れのある人を忌むこと甚だしく、さういふ者が近よれば取つて數十歩の外に投げたといふ（作陽誌）。ある時寺山某といふ武士が、兩山寺に來つて之を見物して居た時に、護法は彼が不淨を憎んで追ひのけようとした、寺山も勇士だから承知をせず、兩人掴み合ひの末、崖から谷底へ轉がり落ち、二人とも死んだといふ話があるが、是だけは少なくとも近代の事實らしい。しかも二人の屍を其處に合葬して、記念の爲に松を栽ゑ、之を護法松と名づけて居るのは、他の多くの傳説の様式と異なる所はなかつた。

詐偽や虚構がもし傳説の起原ならば、斯うして萬人の目に觸れる松や巖石の名になつて残る道理が無い。といふ風に昔の人は考へて居たのである。兎に角に永い歲月の間には自然に誤傳せられるかも知れぬが、其發生の根本に於ては、少なくとも一般に承認せられた或出来事はあつたのである。傳説は要するに其事蹟の公けの記憶であつた。それ故に屢々我の歴史と傳説とが混同せられようとしたのである。歴史と傳説とが混同せられてはなぜ悪いか。それを明瞭に説明しようと思へば、溯つて傳説の由つて來たる所、即ち人をして有り得べからざる事を信ぜしめた最初の力を、考へて見なければならぬことになる。それが日本では比較的容易の業なのである。

眠りの衆

我々が奇跡を承認するには幾つかの條件があつた。神徳佛力の最も普通なる發露は、言

ふまでも無く罰と利生とであるが、それは大抵個々の人又は小家族に限られて、公衆共同の問題となるのが存外少なかつた。社會全體の事件としては、示現といふものが特に重要である。始めて守護の神靈が土地に降臨したまふ場合は固より、後々何か吉凶の大事が起らうとするに先だつて、何も氣付かずに居る人々に不時の御知らせがある。其感動は大きなものではあつたが、滅多に起らぬのみか豫め何の用意もせぬので、大事件の割には傳説として保存する方法が立たず、従つて時の経過と共に散漫に歸したものが多いやうである。保存の方法とは祠を建て塚を築き木を栽ゑ、もしくは其場所の土石の原形を維持して、誰でも其側を過ぐれば思ひ出すやうにする以外に、毎年期日を一定して自然に其記憶を新たにするのが習慣でもあつたらしい。ところが臨時突發の出來事だと、わざ／＼其爲に記念日を設定しなければならぬが、既に期日の定まつて居る年中行事ならば、さういふ必要は無かつたわけで、是が儀式と關聯した古い傳説の、保存せられ易かつた原因の一つであつて、必ずしも昔の奇跡が儀式の起原であり、又は傳説が其儀式を説明せんが爲に案出せられたかの如く、考へるには及ばぬと思ふ。

儀式の最も多く傳説を發生せしめて居るのは、やはり神佛の啓示指導を求むるもの、即ち普通にト方(ウラカタ)といふ行事である。ト方は言はゞ要望せられたる示現、従つて又豫期せられたる奇瑞でもあつた。是にも頼朝の房州旗揚げ、義家の安倍退治といふが如き、特に臨時の大問題の爲に、吉凶を神に伺つたといふ話も傳はつて居るが、さういふ事件は何百年に一度も起り得ない。通例村の生活に於て早く知りたいことは、何と言つても耕作の成果如何、それから風水早魃と疫病害蟲の有無、或は新たに計畫する土木工事などの、果して安全に又幸福なりや否や、是には地頭から下僕まで、共同の利害を感ぜざる者はなかつたのである。従つて其誠意熱情の凝り固まつた場合に、一致して不思議な現象を實驗したことが、時々はあつたかも知れない。それが信心を同じくする者の集合的幻覺であつたかどうかは、たゞ今後の社會心理學の、研究だけが之を決し得るので、漫然我々が信じ得ないといふ理由を以て、彼等の信じたといふ事實を否認することは出來ぬのであ

る。例へば安房三河の寺の僧が射た箭だけは、衆人の見て居る前でいつ迄も鳥の如く飛んで、十町もさきへ行つて落ちたかも知れず、其箭が地に立つと成長して竹藪になつたかも知れない。其證據は到底得られぬにしても、少なくとも周囲の關係者は、夙に一樣に之を信ずることが出来た故に、傳説は乃ち成立つたのである。別の言葉でいふと、弓箭を占ひに用ゐる習俗、心の奥底から其當りを以て神の御思召なりと解し得る信仰が、所謂白羽の箭の多くの傳説を産んだのである。

さうして此信仰行事は何百年とも知れぬ繰返しを重ねて、現に其一部は我々の目の前までも傳はつて居る。大體にそれは二通りの目的があるが、最も例の多いのは定期の神事、土地によつて歩射とも射とも、百手（モモテ）弓祈禱とも謂つて居るもので、是には的に鬼の字を書き、箭竹を特定の地で採取するの作法などが守られて居る。第二は臨時に土地を區劃する場合に、神に祈請してから弓を射る境を定める風、今でも白羽の箭の形をしたものを地上に刺し、もしくは建て前棟上げの日の柱の上端に、弓に矢を張つて吉方に向

けて射放す形にして置くなどは、普通に我々の目撃する所である。土地の東部の山村では、墓地の選定の爲に箭を空中に射て、その落ちた處を神から與へられた土地と考へる風があつた。伊勢濱荻といふ書には、神宮の祠職たち、柩を埋めんとするに先だちて生木の弓、紙の羽の矢を以て空をさして射る風があつた。他國には無きこと也と著者は言つて居るが此通りにちやんと土佐にあるのである。

武家が新たに城地の縄引をする際に同じくこの弓矢の占を試みたことは勿論であつたらう。琉球などは近代絶えて久しくこの武器を使用せぬ島であつたが、遺老説傳には久米島の仲城の按司、始めて仲城山の城を築かんとする時、士卒と共に此山に登り、弓箭四つを執つて躬ら之を試み、其善地なることを知つたといふ舊話を載せて居る。薩摩でも出水郡木牟禮の古城などは、建久七年島津忠久入國の際、老臣本田親恒此あたりに公の居城を定めんと欲して、笠山の頂上に昇つて、今もある矢石といふ石の上で神に禱り、目を閉ぢて數回廻舞して後に矢を射放し、箭の落ちた處に構へたのがこの城であつた。其時矢の勢ひ

によつて、後の山の上に雲を生じた故に、今に至るまでその後の山を矢之瀬山といふとの傳説もあるのである（出水風土誌）。

傳説と習俗との關係を證明しようとするには、斯んな細かなことまでも注意して置く必要がある。例へば右の一例の中で、目を閉ぢて四五へん廻つてといふ點などは、寧ろ傳説の基礎をなす所の、古くからの習俗を語るものだつたらしい。出雲の富田城址の口碑なども、突如として悪七兵衛景清の現はれ出たことを、土地の歴史家たちは何と解して居るかも知らぬが、是も亦同じ習俗の九州南部だけの特色で無かつたことを、推量せしむるに足るものである。景清と八幡との因縁は、日向の生目八幡の方が元らしいが、是は偶然だとしても、少なくとも彼は人工盲目の代表者であつた。盲で能く信仰を談ずる者の鼻祖であつた。その盲の景清が闇の夜中に、虚空に向つて射た白羽の矢がもし適中したとすれば、それは人間わざでは無いといふことに、判断し得られるのは當然の話であつた。

次に鎮西八郎が大蛇を退治したといふ話は、肥前川上郷梅野村、即ち黒髪山下の一つの

部落に、古來梅野の座頭と稱して住んで居た一團の盲人が、語り傳ふる所のものが元であつた。此座頭は老少と無く代々一刀を帶し、且つ爲朝の射殺した大蛇を、水中に飛込んで引揚げて來た盲の子孫だと稱して居た。其時爲朝の射た箭は飛んで川上明神の森の楠の木に立つたといふ傳説になつて居たが、二百年餘り前の頃其楠の枝が折れて、樹の中から偉大なる雁股の矢の根が顯はれたことがある。是こそ正しく爲朝所用の鏃なるべしとて、永く神社の寶物にしたといふことである（鹽尻一二）。誠に股の一方が八九寸もあり、中子は一尺以上もあるといふ大雁股ならば、それを射ることは只の人には出來ない。神に非ずんば則ち爲朝といふことに、決著するのも致し方は無いが、果して其様な大きな鏃であつたかどうか。私は後に列記しようと思ふ多數の類例によつて、此神社の神木の楠に、箭を射立てたのは此時一度だけでは無く、さうして又刀を帶びて居た梅野の座頭が、毎年頼まれて此祭の箭を射たのでは無いかと思つて居る。

瀬戸内海の周圍の諸郡には、村の春祭に百手の射禮を行ふ土地が多い。其中でも殊に嚴

重なる例の一つは、香川縣三豊郡莊内村、大濱浦の船越社の式であつたが、今は早どう改まつて居るかを知らぬ。此神社の祭典の當日は舊二月朔日であつた。しかし正月の十一日から、もうその弓祈禱は始まるので、二十二日には射場を定め、巻藁を作つて之を射るのであるが、巻藁の中には五穀を収めたといふから、其當りを見ることが他の地方の管粥粥、占と同じく、一種農作を占なふ方法であつたことは疑ひを容れぬ。ところが此射法を教へる人を、土地では禰武利の衆（ネムリノシユ）と謂つて居たさうである（西讃府誌）。他の村里にも此名稱が行はれて居るかどうか。詳しく調べた上で無いと斷言は出来ないが、私は此ネムリは目を閉ぢること、本來は弓射の式を行ふ者が、臨時に目無しになつて射放つのが式であり、全然其結果を神意に委ねて居た習慣に、基づくものでは無いかと思つて居る。

しかし實際は多くの場合に、そんな事をする必要の無い者が、此式には参加して居たのである。村の少年の、平生少しも弓矢を持扱つたことの無い者がたゞ短い期間の準備を以てこの役をつとめたのである。伊豫の大三島などの各村では、大抵正月の始めに弓祈禱を行ふのであるが、射手の青年、其期に臨み射術を練習し、又祭の日の二十日も前から嚴重な物忌をして毎朝水垢離を取る。といふわけは此日の成績によつて、自分の部落の一年の吉凶が定まるものと思つて居るからで、本人の意氣込は固よりであるが、見物も亦手に汗を握るのである。此點は以前の村相撲、綱曳、競馬、牛驅なども皆同じであつた。祭の日の選手に取つては、技藝の練習と信心とは、何の差別も無い一續きの努力であつた。獵も戦も神事の一部であつた時代が、彼等の心持を透してまだ窺はれるやうな氣がするのである。諏訪大明神畫詞といふ書物は、南北朝期の末に出來た記録であるが、其中には武家の射禮の事が多く述べてある。三月卯日の祭には的射の勝負があつて、負方は髪を亂され顔に墨を塗られると書いてある。武家の春の始めの賭弓（ノリュミ）に於ても、射損じて坊主になつたといふ話が多い。それは單なる名譽心の破産からでは無い。神に見離されるやうでは、最早侍の職に居られぬといふ意味であつた。弓矢の道といふ言葉には、斯うい

う宗教的内容があつたのである。だから其約束は獨り武人だけで無かつた。熱田神宮の正月十五日の歩射的會などは、神官馬場氏大喜氏、其他祝部中藺各二人づつ、出でて毎年の役に任じたが、もし射損すれば社輩を除名せられるのが、近世までの定めであつた（尾陽歳事記）。昔は腹を切つたこともあり、後々も神慮に應はぬ者として、即座に出奔しなければならなかつた。射はづした社人の家の赤飯などは、大地に棄て、置いても犬鳥も喰はなかつたとさへ言はれて居る（尾張名所圖會）。

ところが今日では實際はさう安々と弓は當らない。射術は信仰よりも更に衰へて居る。前年私は三州作手（ツクデ）の山村に遊んで、處々の村社に設けられた祭の射場を視、又詳しく最近の實狀を尋ねた。射場には金銀の小さな物を立て、最後に之を射る競技がある。金的が當るとわざと箭を抜かず、的と射場の土と一緒に、三寶に載せて其まゝ神前に持つて出て供へる。射手には大鏡餅其他の賞品が出るのだが、此地方には弓術の先生があつて、平生から稽古をして居るといふことであつた。そこで私は聞いて見た。もし其的

がどうしても當らぬと、どうなるのかといふと、當るまで祭の日が延びなければならぬのださうである。下手ばかり多くて二日も三日も射はづして居る年は、先生を頼んで當て、貫ふこともあれば、時には箭を的のところへ持つて行つて突通し、それを進献して祭を終らなければならぬこともあると、苦笑して私に告げた。神も多分は苦笑したまふことであらう。以前は眼を眠つてさへ遠くへ飛び、圖星と思ふ地點に突立つたことがあつたものである。スポーツの記録の毎年前進する時代には、過去を談ずる機會はあるまいが、それが退歩を始めるとレコードは即ち傳説となるのである。弓矢には限らず、劍でも槍でも又力持でも、昔の人の逸話には驚くことが多い。勿論其説には誇張もあつたが眞偽の境などは話して居る者には判らない。例へば辨慶は千人力と謂ふのがうそでも、百人力も無かつたらうとは誰も云はぬ。それと同じ様に大昔の弓の奇瑞は、時代が遠くなる程、益々非凡になつて行くだけで、いつ何人が、偽りを言はうと思つて設けたといふことは無いので、それだから又一同が之を信じ得たのである。其上に我々は弓矢の信仰と技能との衰微を意識し

て居た。今でも大當りのシンボルに的を貫く矢を慕がく如く、神の白羽の矢が常に人間の幸福を、目標として居た時代があつたと思つて居た。是が我々の矢立杉の傳説を、特になつかしいものにした原因であつたことは、先づ疑ひ無いやうである。

(昭和五年一月「旅と傳説」)

武藏野と水

昭和六年七月三日放送

一

水に因みある武藏野の傳説を、今夕私が放送して見ようとするのは、夏むきに少しでも涼しい話をといふだけでは無い。日本全國の隅々に亙つて、傳説は實は水に關するものが最も數多く、又最もよく人に知られて居る。今度各地方の同趣味者と共に、日本がどのくらの澤山の昔懐かしい傳説を持ち傳へて居るかを考へて見ようとするに當つて、出来るだけ誰にでも心づく實例を擧げるとなると、自然に我々の注意は此方に向つて行くのである。

一口に言ふと、日本は水の豊かな國、さうして又水の恩徳を深く仰ぐ國であつた。田植に雨を待ち雨を喜ぶ者が、三千萬人もある以上に、物を滌ぎ淨めると稱して、たゞ洗ふといふだけでは氣が濟まず、ざあ／＼と水を流すことが國民一同の好みであつて、よほどたつぷりと水が無いと、どんな靜かな土地にも落着いて永く住み得なかつた。其水がもし少しでも足りないとなると、足りないといふことを非常に氣にかける。それで居ながら他の一方には、水の乏しい大陸の國の人たちの、全く知らない水害といふ苦勞をして居る。前後との両面から、水を忘れては片時も生活を續けられぬのが日本人であつた。所謂水部傳説が盛んに發生して、なほ次々に成長し進化して行くだけの、條件は具備して居るのである。

だから我邦の傳説の種類が、假にざつと二百種あるとすると、其中の八十までは水に因みのある傳説で、樹木と巖石に關するものを合併してほどその同數、残りの四十種が他の雜多なる言ひ傳へと、いふ位の割合にもなつて居るのである。この總計は無論概算で、今はまだ精密に之を算へ上げる方法も無いが、傳説の種類は兎に角にさう無限のもので無い。僅かづつの相異を別々に勘定して見ても精々のところが七百か八百、千といふ數には中々届きさうにも無い。そんならどういふわけで今日一郡の郡誌に、平均百近くの傳説が掲げられ、一つの村一つの名所を繞つて、時としては二十も三十もの傳説が記憶せられて居るのか。それを集めて見たら直ぐに一萬にも二萬にも達するでは無いか、と言つて詰問しさうな人がもとは随分あつたが、此頃はもうそれだけは稍わかつて來たやうである。

つまりは全國の端から端にかけて、同じ一つの傳説が誰の目にもよく知れるやうな共通點を具へて、そこにも爰にも並び行はれて居たのである。以前は人が遠方の者と話し合ふ折が稀であつた爲に、各自之を我土地のみの珍聞とし、寧ろ類例の存することを知らぬやうな相手だけに、話して聽かせる爲に貯へて居た姿があつた。さうしてたつた山一重を隔てた隣の盆地にも、同じ言ひ傳へのあることを互ひに知らずに居たのである。六つかしい言葉だが我々はその孤立状態の一つ／＼を傳説の共信圏と言つて居る。共信圏の半径は少

しづつ大きくなつて行く傾向を持つて居るが、ちようど水上に浮ぶ泡の球などの如く、二つが膨れて行つて兩端が接觸すると、一つが他を併合する場合は却つて少なく、大抵は二つともばちんと消えてしまつた。さうして一人の最も優れたる旅人が、次々と村里を巡つて同じ様な事をしてあるくといふ類の傳説のみが、差支へが無いので兩立して残つたのである。ある一人の地方的英雄、もしくは高僧の遺跡と稱するものが、多く残ることになつたのは此結果であつて、是には九州では人聞菩薩（ニンモンボサツ）、北陸では泰澄大師、他の地方に於ては高野の弘法さんなどが、最も人望の多い傳説の主人公になつて居た。

一一

例へば昔、乞食のやうな破れ衣を着た旅僧が来て、島の芋をくれないかといふ。遣るのが惜しさに此芋は固くて食へないといふと、さうかと言つてさつさと歸つてしまつたが、それ以來其土地には斯んな芋が出来るやうになつたと稱して、水邊などには屢々「くはず

芋」が茂つて居る。即ち此草の生ずる土地へは、大抵は弘法大師が来て居るのである。又旅僧が汚れた法衣を洗つてくれと頼んだところ、川に水が無いから洗へないとうそをつくと、それから其村だけは水が川を流れなくなつたといふ類の話が、多くの水無瀬川に就いては傳へられて居る。或は又之と反對に心の優しい女性の、機を織つて居たのが、わざわざ其機から下りて、遠くに往つて新らしい清水を汲んで来て進める。そんなに此邊では水に不自由をして居るのか。よし／＼私が水を出して遣らうと謂つて、柳の木か何かの杖を地面に突き差すと、そこから清い泉が湧き出して今の弘法の井戸となり、其杖は根づいて大木になる。斯う云つた類の傳説はたつた一種でも、全國に何百箇處、事によると千以上もある。少なくとも目録には取りきれず、又殆ど何人でも、一つ以上の例を知らぬ者は無いといふ實狀である。

珍らしいのは決して或傳説が、たゞ一箇處にしか無いといふ點では無かつた。今でさへ他處に同じ口碑が有ることを知つて、力を落すやうな人たちである。さうやたらに借り物

を持つて来て見ても、仲間の者が承知した筈は無い。同種國民の相似たる感情と想像力との産物とはいひ條、よくも是ほどまで各自申し合せたやうに、同じ形の傳説を持ち傳へて居たものである。殊には其記念として今も名に負ふ清水があり、もしくはその親切な婆の家といふのが残つて居たりするのを見ると、どうして又此様な言ひ傳へが、一致して各處に併存して居たかといふことが、實は何よりも大きな不思議であつたのである。

我々がそれを格別の問題にしなかつたのは、めい／＼が一時に方々の傳説を考へて見るやうな機會が少なかつたからである。つまりは地方の知識と研究が割據して居たからである。郷土の古い生活にそれの／＼愛着を抱く人たちが、今回のやうに共同してこの興味ある社會現象を考へて見ようといふことになれば、當然に我々は新たななる何物かを學んで、改めて互ひに隣の縣郡に住む者の生活を考へ直すことになり、追々には國が本當に一つの國であつたことを、はつきりと意識し得られようかと思ふ。是はラヂオのやうな新文明の最も有難い恩惠の一つと言つてよい。問題はたゞに一箇傳説の上のみに現はれた共同の思

ひ出には限らぬのである。

三

私が只今住んで居る多摩郡の片ほとりなども、やはり昔の武藏野の野中であるが、武藏野だからといつて別に特色のある珍しい傳説が、残つて居るわけでも何でも無い。單に此地方がいつ迄も野であり、又隣に大きな都會が興り榮えた影響を受けて、全國共通の同じ一つの傳説が、幾分か他の地方と異なつた経路をとつて、發達しようとして居たといふことが言へるだけである。

その一つの特徴は、京大阪の周圍の田舎も同じやうに、夙くから記録文學の干渉を受けて居ることである。好い意味からいふと、古くあつた傳説が消えずに居る。其代りには後から新たに生れたものゝ力が弱い。通例どこの土地でも、傳説の成長するといふことは、古くからあつたものが是に押されて、引込み隠れ消えてしまふことを意味して居た。それ

が書いたものに残つて頭張つて居ると、少なくとも是を知つて居る者だけは、それと突き合ふ新らしいものを信じ得ない。ところが大都と其近郊のやうに、國の四方から次々に寄留者の入つて来る土地では人は古い事を愛し又求めても、在來の居住民の共信圏には加盟し得ず、寧ろ書物を搜してそこに幽かに残つて居るものを鑑賞しようとする。従うて僅かな地積の中に、新舊幾通りかの傳説が、入り交つて流布することになるので、ちようど堀割などの新らしい土工によつて、偶然に幾つかの地層を示したやうな結果を呈する。是が又過去少なくとも七八百年間の、この武藏野の水と人間生活との交渉を語つて居る點に於て、ちよつと他の地方では見られない興味があるやうに思ふ。

江戸の所謂知識階級が、この武藏野の前代生活を、懐かしがつたことは一通りでなかつた。其爲に中古の文藝記録は捜査せられ、殆ど一切の斷簡零墨をも見遁さなかつたのみか時としては其曲解誇張改造すらもあつた。それを編纂した名所記地名考といふ類の書物は、消えて年久しいこの武藏野の傳説が、今も生きて働いて居るものゝやうに語られて居

るのである。其中でも有名なもの、いやしくも文學に多少の修養ある人が、武藏野と聞けば直ぐに思ひ出すものは、遁げ水と掘兼の井の二つであつた。この二つは有名ではあるが二つとも、精確な意味での傳説では無い。言はゞ前かた傳説であつたものゝ痕跡ともいふべきものである。しかもそれが京都に於て人に知られ、古く和歌などに詠まれて居る爲に最も確實なものゝ如く多くの讀書人には考へられて居たのである。

にげ水は即ち遁げる水、有るかと思つて草を分けて近よると見えぬ、かげろふまぼろしの如きものであつたといふ説と、或は某村に在る年取らず川の如く、一年の或期間水が伏流となつて地下を行く故に、さういふのだといふ説とがあつたが、是は何れであつても大よそは同じことに歸着する。ところが今一つにげ水は苦水即ち潮のことで、海から上つて來る高潮の爲に、作物の害を受けることをいふと説いた人もあるが、此方は今まで多くある歌の記録とは一致せず、即ち歌人たちが間違へて居るのだといふことになるのだから話は六つかしい。にげ水はやはり文字通り、遁げる水と解した方が自然である。つまりは

此野を歩き過ぎる者が、常に飲む水の乏しきに苦しみ、水が遁げまはるといふ類の言ひ傳へを發生せしめて、それが遙々の都まで評判になつたもので、殊に武藏野に人の住み難く、村落の起り難かつた或時代を、想像せしめるに適して居た。是も必ずしも武藏野だけで無く、大よそ水の得にくい廣野にはどこでも有りさうな話で、それには又どうして其様な珍しい現象が有つたかを、説明した語り事なども存したことと思ふが、今は殆ど皆消えてしまつて、殊に名ばかりが永く歌の題材として、記憶せられるに過ぎなかつたのである。

次に掘兼の井もやはり名稱だけしか残つて居ない。古くは「枕の草子」に、「井は堀兼の井」とあるのが、誰にでも注意せられて居る。但しこの方は掘兼とは言つても、兎に角に井であつた。人が辛苦して漸く水に近づいたといふのだから、時代としては幾分か遁げ水よりも後であつたらうと考へるが、この二つはいつでも相關聯して、文人たちの話題に上つて居た。今日の所謂村山高地、以前狭山と謂つた丘陵帯の東側には、爰がその掘兼の井の舊跡だと、近世になつて新たに指定せられた場所が幾つもあり、その一つは現に村の名

にもなつて居るが、是は最初から一箇處で無ければならぬといふわけも無かつた。三つも五つもそちこちに有つて不思議は無いのである。但し江戸の文人の中には、餘りにも古い武藏野の生活を懐かしがる結果、これも前に言つた苦水と同様に、出来るだけ海岸近く、又大都會の近くへ其遺跡を引寄せようとして居たが、是だけは確かに誤りであつた。後世太田道灌が設計したといふこの海沿ひの岡の都は、實は少しでも水が遁げたり、又井戸を掘兼ねたりする地では無かつた。此邊がもし早くから開けて往來の筋になつて居たならば寧ろ其様な傳説は起らずに濟んだらうとさへ思ふのである。

今日の地形からも察せらるゝ如く、この東京の地などはもとは三方に大小無数の入江があり、水は多過ぎて排水が悪く、海は又遠淺であつて、船渡しの津も得ることが六つかしかつた。草に蔽はれたる廣漠の野を、東から西へ抜ける道などは斷念せられて居た。北から南に向つて武藏野を横ぎらうとするにも、又この邊は大分通り筋からはづれて居た。弓の弭（ユハズ）が隠れるといふ程の高い草原の中を行くのに、前途の見通しが付かなかつ

たら歩けるわけは無い。だから勢ひ西に寄つた村山の丘陵地帯に沿うて進み、折々は高地に憩うて目標を定めなければならなかつたに違ひない。所謂多摩の横山の名が先づ文獻に現れたのも其爲で、實際多摩川右岸の小山脈は、北から來る村山路の前面に横たはつて居る。武藏の國府がちょうど其丁字形の結び目に近く建てられたのも、武藏七黨と言つた舊家の多くがこの縦横の丘陵地の麓の地名を苗字にして居るのも、共に中世の國道がこの一帯の丘陵を利用したのと、同じ原因から導かれて居る。さうして同時に是が又、平安文學の遁げ水、掘兼井の發生した道筋でもあつたのである。即ち簡單なるたゞ一箇の井戸の名が、可なり鮮明にこの地方の生活を語つて居るので、つまり此方面に於て今も折々屈曲した横穴の井の跡を見るといふ如く、爰は鑿泉の技術の何としても發達しなければならぬ土地であつたのである。

四

中世以後の武藏野の村は、少しづつ此筋から東の方に向つて新らしくなつて居るが、それはたゞ平押しに東へ東へと、進んで來たのでは無いやうである。鎌倉繁昌の時代に浪人を寄せ集めて、多摩の野に田を拓かせたといふことは、既に吾妻鏡にも見えて居るが、其時は主として多摩川本流の兩岸の低地であつたらうかと思はれる。それでどうやら海岸へは早く達したけれども、この高い臺地の方は江戸期も半ば過ぎまで、尙依然として昔の草地のまゝであつて、ただ飛び／＼に處々の谷合、此邊の言葉でクボとかヤツとかいふものだけを村にして居たのは、是も用水の関係であつたらしいのである。

幸ひなことには武藏野は東に向ふほどづつ、段々に地下水の露頭が多くなつて居る。水がもう遁げなくなつて居る。それを草が深い爲に久しく心付かずに過ぎたのであつた。泉が發見せられると村は皆其まはりに起つた。是が此地方の第三番目に古い村々である。多摩の各郡では近年方々で地下の調査をして居るが、此野の下の砂と小石と赤土黒土の層は、我々の傳説層以上に高低亂雜になつて居る。さうして記録には傳はらない度々の地變に因

つて、それが又何回も動いて居たやうである。それをたゞ地面の上からばかり見て居ると、處々の谷合の片隅に、今まで無かつた泉が湧き出したり、流れて居たものが細くなり、又は突然止まつたことが度々あつたので、單純なる住民は途方に暮れ、又は水の有難味を深く感じた末に、いつでも其奇蹟を神佛の御利益に結び付けて考へようとし、従うて多くの傳説は新たに生れたのである。

傳説の起りが之を持つて居る村より古いといふことは有り得ない。遁げ水堀兼の井の名稱が京都に傳はり、歌になり歌枕にならうとして居た時代に、やつと開かれたらうと思ふ村にも傳説がある。清き泉の傍には例外無しに神の社又は佛堂が建ち、それに奉仕する法師修驗者等が、多くは村人の靈魂までを管理して居た。此人たちは閑に任せて、土地の傳説を取り集め又修飾して、幾分か重苦しい縁起といふものに作り上げたものもあるが、實際に農民の胸の中に湧き起つたものは、さういふ中からでも之を掬みわけける事が出来た。或は又此種の社傳寺誌とは獨立して、今に至るまで口から耳へ、耳から口へと傳はつて居たものも

若干は残つて居る。只残念なことには持主も遠慮をし、隣の都府に来て住む者も之を輕んじて、耳を傾けて聽かうとしなかつた故に、其一部分は知らぬ間に消えてしまつたのである。

それを片端から尋ねて行くと、どうやら鎌倉以後の開墾者のどこから來てどうして暮して行つたかゞ、ちつとづつ判つて行きさうである。大子といふ巡遊神の村の信者を憐み助けるといふ信仰は、實はよほど古くから有つたものらしいが、爰でも通例は之を弘法大師のことゝ解して、今尙深い感謝はこの幸福なる名僧に向つて捧げられて居る。しかし稀には又八幡太郎の弭(ユハズ)の清水といふやうに、佛法以外の英雄にも靈泉發見の功績を歸した例がある。八幡の社が村々に多いのは、源氏の將軍の影響、殊に徳川家が此神を重んじた爲だつたといふ人がある。それはたゞ推量の說に過ぎぬが、兎に角に八幡太郎は前後兩度まで、奥州を征伐に往つて、どこか關東のこの附近を往復したらうと想像せられて居る武將だから、其人を神を祀つたといふ遺跡が、處々に傳はるのは自然である。

しかも八幡太郎は八幡の申し子で、石清水の神前で元服した故に八幡太郎と呼ばれたと

いふだけであるのに、それにこの半分神様のやうな宗教的威力を説く者があるのは、やはり其名に基づいた一種の混同が久しくあつた爲、即ちこの人の通稱を解して八幡の太郎、若宮乃至は王子神としたからで無いかと思ふ。この邊の御社の神木には、往々にして源義家の旗掛櫻、又は白旗松などといふ傳へがあり、水には又旗洗ひの池などの名も残つて居る。殊に珍らしいのは同じ武將に托して、誕生井もしくは産湯の口碑を存することである。旅行だけならば行く先々で白旗を洗はせたといふこともあらうが、一人がさう方々で誕生しよう道理は無い。是も恐らく神の子の出現と泉の涌出とを結び付けた信仰が元であつて、多分は後永く同じ清水の詣に於て、感謝の祭を執り行うて居た人々が、毎回その由來を語つて居たものゝ名残であらう。兎に角に人の名だけはちがふが、全國に亘つて至つて類例の多い傳説である。

新篇武藏風土記を見ると、府中の町に近い人見村の淺間様などは、村の西北の岡の下に清水があつて、御神體の一尺ばかりの銅の御像は、最初その泉の中から出現したと傳へて

居た。さうして時々雨乞の祭の際には、泉の傍へ其神體を持ち出して祈禱をしたといふことである。即ち泉と神様の出現とを不可分の關係に置いたことが、自然に誕生水の言ひ傳へを生じたので、もし御神體が無い場合には、普通には井の際に御社を立て、さうして信心深い人々だけは、そこに神様の幻しを見ることが出来たことと思はれる。北歐羅巴などの多くの田舎に於ても、やはり古い信仰は斯うして清い流れの岸に留つて居る。後に基督教の法師たちが、努めて之を聖母マリヤと御子の示現、さては代々の聖者達の巡歴譚などに改めて、いつ迄も之を保存せしめようとした。實際の生活の必要に基づいて生れたものを、根こそぎ抜き棄てるといふことは、如何なる統一宗教の力でも容易でなかつたからである。

五

同じ解釋は他の幾つかの傳説の、御手洗の池に伴なふものにも適用して見ることが出来

る。その一つは是も類例の最も多い片目の魚の話である。東京の近くでは上高井戸の醫王寺の薬師などがそれで、御堂の前の池に願掛けの人たちが、魚を持って来て放すと必ず片目になる。下流の小川などにも稀にこんな魚が居ると、是は御薬師様の鮒だと言つて食べ、てしまはずに必ず此池に持つて来て放したといふから、始めは二三疋でも段々に片目のものが多くなつたわけである。此話は武藏だけでも捜したら十箇處二十箇處では無ささうに思ふ。そんな話を遠方から借りて来て急に言ひ出さうとしても、近所の人たちが承知しやう筈は無い。つまりはさういふ習俗又は信仰が、個々獨立して方々に古くからあつたのである。其由來は今日は略判明して居る。それは生牲と稱して神にさし上げる生き物を、尙暫らくの間生かして置くことで、通例は丸一年、即ち前の年の祭の時から、是は次の年の御供物ときめて置いたのである。佛教の人たちは此慣習を利用して、八幡の社に於ては放生會といふことを始め、いつまでも殺さずに活かして残すことにした。しかも間違つて人が捕つて食はぬやうに、片目は目じるしに抜いて置く習慣が、土地によつては永く現實に

續いて居たので、本來は魚が自然に片目になつたわけでは無いらしいのである。しかも聞いたことは以前は其目じるしは魚ばかりで無かつたと見えて、神に奉仕した人間にまで、代々の主人は皆片目などいふ傳説が残つて居る。是などは確かに習慣儀式の方が先きで、傳説は之に嗣いで起つたかと思はれるが、この武藏平原のやうに、近世に近くなつてから拓かれた村々にまで、斯んな古い口碑の分布して居るといふことは、歴史として前代の信仰生活を溯つて見ようとする者に、可なり有力にして又新らしい参考である。

其次には是も全國に例の多い強清水の傳説、即ち泉の水が掬んで見ると酒だつたといふ話である。日本では美濃の養老の瀧を始めとし、是にも妙に父と子との關係を説く者が多い。關東から奥羽へかけての多くの話は、親が酒すきで買ふ錢も無いのに、いつでも酔つぱらつて還つて来る。息子が不思議に思つて跡をつけて行くと、がぶく〜と此清水を飲んでよい氣持になつて去つたので、自分も掬んで見たが只の水であつたといひ、「親はもろはく子は清水」といふ歌もあれば、或はそれを其泉の名にして居る土地もある。ところが事實

そのコハシミツといふのは、一種酒を醸すに適した水質の水を意味して居たらしく、同時に又其名のある清水の邊に、鎮守の神の御輿を迎へ申して祭をする例も諸國にあつた。乃ちこの例祭の日の神酒に限つて、必ず此強清水の水を用ゐて、造る習はしであつたことが推測せられるのである。

東京府下でも清戸宿の附近に、清水といふ小さな部落があつて、やはり此傳説をもつて居たことが新篇風土記に見えて居る。この親子といふのは多分誕生水なども同じ關係で、神の生れたまひし清水なるが故に、汲んで酒に醸して祭の日を楽しくするに足ると考へたものが、轉じて特殊に幸運なる親子の話となつたものかと思ふ。又南郊目黒の千代ヶ崎といふ處では、この酒泉の発見者は馬方であつたといふ話になつて居た。馬方は屢々神の特別の恩寵を受けたと傳へられる。それは神々が馬に乗つて此世に降りたまふといふ信仰と關係のあるものらしい。兎に角に馬方が此水を飲んで毎日酔うて歸つて來るのを、或人が心付いて其所在を教へてもらひ、そこに酒屋を立て、忽ち長者になつたといふ。酒は今日で

こそ會社の工場で造るが、もとは其條件がもつとやかましくて、祭の時にしか造つて飲むことを許されなかつた。それを平日から飲みたがる人が多くなつて、神主又は氏子中の頭だつた者が先づ酒造家になり、古酒を貯蔵する技術が始まつて、始めて日本は今日の如く、晩酌おしきせ酒の本國のやうになつたのである。全國に遍滿する強清水の傳説は、偶然にもこの未だ調査せられざる歴史を暗示して居るかと思ふ。

六

この武蔵野の海近くの、すつと近代に接して始めて開かれたかと思ふ土地に、尙こは清水や片目魚の物語があるといふことは、傳説の文化史上の意義を考へる人にとつて、大變に重要なことである。多くの田舎では今ある傳説が出来る時に、古くからあつたものが、殆ど皆消えたり、又は改造せられて跡方を留めなくなつた。それで口碑の内容が古いから、傳説そのものも亦同じ位古くからのものだらうと思ひ、たとへば弘法大師が來たといふか

ら、延暦年間から立つて居た村などと、村の長命を誇る理由にもしたのであつた。ところが武蔵野だけは、その傳説發生の年代を區切るべき目標が、中と外とに二通りあつた。内には幽かながらも舊傳説の形體がまだ残つて居ること、外には村々の歴史が、ほど地理學上からわかることである。多摩四郡の村々は、水を獲得する技術の發達に伴なうて順次に起つた。(一) 最初には川の流に就いて汲み、又は笕を以て谷水を引く村であつたが、是は地層の構造上伏流が多くて、表面の水は往々遁げて行き方が知れなかつた故に、何處に行つても自由に村を開いて住むといふわけに行かなかつた。それで大川の近くか、又は岡の側面に横穴を穿つて、入用の水が得られる處だけに、僅かづつの聚落を作る他は無かつたのである。(二) 次には地下水の露頭の搜索、是は東多摩の草原を掻き分けて行くと、案外に多くの井の頭を見つけることが容易だつたのである。その井の頭の中には今の井頭公園の如く、廣い池となり末が小川となつて居るものも幾つかあり、それが實際には東京を大都會たらしめた背後の力でもあつた。但し折々の地震で地下の様子が變り、當てにして

居た清水の量を減ずることもあれば、稀には又涸れてしまふこともあつた。是が今ある幾つかの村を榮えさせ又衰へさせて、その沿革が一段と不明になつた原因である。(三) 其次には豎井戸を掘り下げる技術の普及した時代と、(四) 大規模の水道を以てどこへでも水を呼ぶ時代とであるが、この二つはもはや傳説の管轄外であつて、人は自分の智能を信じ、且つ前の經驗を大事に保存して居る故に、新たに信仰の力を以て對天然の不安と弱點とを補充する必要は無くなり、新たな傳説は此方面からは發生しなかつたのである。

しかし江戸が今日の大都會の基礎を築いた時には、まだ右にいふ第二期の時代を出でなかつた。記録には神田明神と山王権現との岡の陰にある、御手洗の清水の末を汲んで居たと見えて居る。城中には勿論別の泉があり、又處々に小さな湧き水もあつたか知らぬが、市民は主としてこの二つの神様の清水を、生活の源に仰いで居たのである。そのうちに程なく幾つかの掘井戸が掘られたが、なほ一半の供給を目に見えぬ神靈の力に期待して居たかと思はれる。谷中の清水町には稻荷の御社があつた。江戸名所記を見ると、爰にも弘法

大師が来て、獨鉦を以てあの清水を穿り出したと言つて居る。無論そればかりの水では忽ち又不足になつて、先づ近郊の幾つかの井の頭から、蓋のある大窟を以て水を市中に引き、それから追々と遠く求めて行つて終に今日の如く多摩川の上流から、以前の村山丘陵の直下を貫通して、大規模の地下水を導いて來ることになつた。ちやうど傳説が遁げ水掘兼井のものとの形に戻るやうに、改めて再び最初の用水供給法に、近づいて來ることになつたのである。しかしこの二つの給水手段の間には人の家ならば二十代か二十五代の有爲轉變があつたのである。古いことばかりを珍重したがる學者たちが、屢々見落してしまはうとする中世といふものがあつたのである。

たとへば一旦神を祭り寺を建て、靜かに榮えて居た邑落なども、地面の下が變つて水量がひどく減じ、思ひもかけぬ處に新たな泉が出始める。さうすると村は元の姿で取續くことが出來なくなつたのである。今でも東京の西の郊外を散歩して、峽田（ハケタ）通りと稱する岡と岡との間を行くと、無数の泉の跡が既に乾き、人が去つて只の島となり、又

は僅かな林などになつた屋敷跡がある。或は單なる馬跡形の窪地の、再び荒れて草の原に復つたものも多い。その形の至つて小さいものには、往々にして足形清水といふ傳説も保存せられて居る。大昔ダイダラ坊といふ巨人があつて、この武藏國をたつた二足か三足で跨いで行つた、其足跡だといふものがあつたり、或は又富士山を背負つて行かうとして藤蔓を集めたとか、その蔓がきれて地團太を踏んだ跡が凹んだとか、尻餅をついたのが何とかいふ大池になつたといふ類の話が、實はやゝ多過ぎるほどこの邊には散らばつて居る。

たとへば京王電車の代田といふ驛の近くの村などは、此名の大男が架けたといふ橋もあり、又その近くに面積四五反ほどの足跡もあり、それから僅か四五町の東南にも、全くつま先の別方角を向いた足形が尙二つある。さうしてその多くは今も踵のあたりから、ほんの少しばかりの清水が浸み出して居るので、乃ち地下水の露頭の會て存して絶えたことを知るのである。是なども日本全國に互つて、非常に古く又數多い一種の傳説であつた。眞似をする氣は無くとも同じ空想は無意識に遺傳せられて、隨處に出現することは地下水も同じ

であつた。我々の喜悅苦惱、我々の疑惑は曾て驚くほど共通であつたのである。従うて又同じやうな解釋を、要求せずしては止まなかつたのである。多數同胞が期せずして同じ一つの傳説を養ひ且つ育てゝ居たといふことが、此頃になつて始めて我々に分つて來たのである。

(昭和六年八月「旅と傳説」)

「うつぼ」と水の神

一、玉手箱の古い思想

曾て郷土研究誌上でも盛に研究せられた諸國の時鳥傳説の中で、今も自分共の難解に感じて居る一の點は、此鳥が取分けて冥途の鳥又は死出の田長などゝ信じられた理由である。蜀の天子の亡魂などゝ云ふ支那の珍書の記事が、我邦田舎人の通説を作り上げたと言ふことは、既に頗る有り得べからざる話であるが、空を飛ぶ物を靈と考へるのは概して未開の世の常であれば、杳作り或は不悌の妹が化して此鳥と成ると云ふ迄は、彼此共通に基づくと

つてもよからう。獨り他の音鳥は差置いて、時鳥ばかりが幽界との交通を掌つて居たと云ふに至つては、更に相應の理由の存する者が無ければならぬ。通例先づ人の考へに浮ぶのは此鳥の啼く季節であるが(郷土研究、四の二一五)、之に就いては未だ言ふべき所を知らぬ。次には其鳴聲である。昔の人は心靜かに此の天然の語を聞いて居て、常に色々の想像を抱いたやうである。今でも觀察に粗なる人々が時鳥の雌だなどと言ひ、或は郭公と書いて殆ど相混じて居る「かつこう」の鳴聲などは、事によると右の如き口碑の起原を爲して居るかも知れぬ。

右の如き断定には尙ほ危い憶測が累を爲して居るとしても、鬼に角この寂しい閑古鳥の聲には、夙くから一の俗信が伴つて居たのは事實である。「かつこう」は萬葉集の中に屢々箱鳥と詠まれて居るものと同じで、「はこどり」の「はこ」は正しく其聲に由つた名である(松屋筆記)。中代に至つては更に轉じて「はやことり」の稱があつた。源氏の河海抄に雄略天皇の御宇、美作つるき山と云ふ地に有つた事として傳へて居る一話は、婦人が山中に

於て鶯に我背の兒を捉られ早來々々と呼び死に死んだとあつて(倭訓栞中編)最早人が死んで鳥に化したと云ふ有ふれた形式に落ちて了つては居るが、よく觀ると鶯に攫まれてから早來と叫んだのは理に合はず、恐らくは是も以前話のあつた呼名の恠の類で、小兒の魂が此鳥に早來と呼ばれるに因つて脱し去ると云ふ畏怖が、斯う云ふ話の起因になつたかと思はれる。而も其の早來と聞えた啼聲の怖しかつたのも、今一つ遡つて自ら箱々と名乗つた時代の印象を計算に入れぬと、まだ十分に我々には事情を會得しられぬやうである。

誠や今日の如く下駄草履の類までも箱に入れて携へる時代の人には、如何に箱々と叫んでも寸毫も氣味悪くは無いだらうが、此様に箱の使用の自由なことは、在所の住民に取つては是亦甚だしく近世からのことである。什具調度に豊かなる貴人上臈の際を除くときは、斯る手の籠んだ工藝品の用ゐられる場合は限りが有つたので、中に就ても最も主なるものは信仰上の行爲、殊には靈魂の運搬に在つたことは略想像するに足るのである郷土研究、一の四四九頁以下参照)。従つて少なくとも杜鵑の類と見て居た郭公又は布谷鳥を、冥途の使

者なるが如く畏れて居たと解するはさ程無理で無いのみならず、延いては人の魂が體外に保管せられ得るとした古い思想が、形圓く内うつぼなる「なりひさご」といふ一物を通じて、終に今代まで連綿し來つた消息をも窺ひ知らしむる端となるのである。

二、鎮魂の祭

雲井の宮の奥に、今も行はせらるゝ御魂鎮めの御式は、既に如何なる程度に迄、新神道と協調して居るかは、自分の窺ひ知らざる所である。而も年中行事秘抄に由つて古く傳へられて居る阿知女於於の鎮魂歌を見れば、所謂魂宮の決して祭具の容器で無かつたことだけは明白である。議論は避けて茲には唯自分の讀み得たゞけに歌の章句を書列ね、此を沖繩のまぶひ込め（土俗と傳説二〇四頁）と、どの點迄似て居るかを考へて見よう。

あちめ おおお」魂宮に木綿取りしで、たまち取らせよ」御魂狩 魂狩りまし」神は 今ぞ來ませる」

あちめ おおお」御魂見に いまし」神は今ぞ來ませる」魂宮持ちて さり來る御魂魂返しすなや」

所謂生靈と死靈との區別が、古人に取つては排氣鐘内の羽と鉛とであつたやうに、佛道其他の新宗教の行はれる迄は、「たま」にも人のと神のとの、待遇の差等が少なかつたやうである。固より散亂し易いのは雜念充滿せる生人の魂であつたらうが、而も部曲々々の里の神・家の神を鎮め申すに當つて、相似たる方式が採用せられては居なかつたらうか。自分是我邦固有の信仰に、所謂御正體みしやうたいの存在を必要として居たと云ふ説を疑ひ、之を反證せんが爲めに此篇を起した者である。本地佛像の跋扈せぬ時代、又金銀の御幣などの大に用ゐられぬ以前には、果して何を對象として崇敬の誠を致したものであらうか。之に關しては又、今では自社の神宮にも輕ぜられて居る程の村の言傳へを、調べて見なければならぬのである。

村の神道を重んじて居る我々に取つて、看過することの出來ぬ著しい共通點は、神々の

異動遷移と云ふことである。就中神體の漂着と云ふのは最も多くの神社の創立誌であつた。是には尾州津島天王の御葭神事(郷土研究、二の二〇二頁)の如く、手續の至つて明瞭なものもあるが、古い處では多くは櫃箱の類に入つて流れ着いたことになつて居る。思ふに是には却つて古い櫃箱の存在に由つて、此の如き解説を促した場合が多いであらう。何となれば人の所業に出でざる偶然が、其ほど流行し得る理は無いからである。又一方には地形上どうしても漂着の古傳を成立せしめざる社もあつて、笈掛杉笈掛石などの縁起が之に屬して居る。若州遠敷郡堤村の箱明神は、式にも國神名帳にも有る古い神であるが、最初示現の時箱の中に在つて山上に降りたまふと傳へて其山を箱嶽と稱し(若狭郡縣志四)。備後双三郡三良阪の御箱山は、天孫降臨の御伴に此神三種の神寶を容れたる箱を持ちたまふといふ説もあるが、一段と穩當なる他の一説には神體を箱に納めて祭る故となつて居る(藝澤通志)。越前勝山の南なる筥の渡では、秦澄大師白山登りの折に筥に載せて九頭龍川を御渡し申したと云ひ、或は又櫃の蓋に載せてとも云つて、大渡村には渡守の子孫と稱する者、其破片の材

を傳へ有して居る(越前名勝志)。開けると眼が潰れるなど、信じて、箱の内容を究めなかつた間はよいが、古び損じ又は人が木の心を忘れて後は、空虚なる一箇の器を貴重視する理由を、神漂着の夢語りなどに托せんとするのは、極めて自然なる人の思案である。然るにも拘らず、今も尙一二の地方に於て、時として容器其物を拜祀の當體として居るのは、其基づく所魂筥の思想に在りとせずして、果して他に説明の途があらうか。

土佐國には近世の調査ではあるが、神社の御神體を書上げた各郡の神體記と云ふ本があるさうである。其中で高岡郡波川村の蘇我神社は、古くより八幡と相殿にして御神體は一尺二寸四方の箱とあり香美郡赤岡村の「するた」八幡の神體は、鏡一面及び曲物の鉢一つで、其鉢には天正十二年の銘があつたとある(明治神社誌料)。南路志の記事には尙ほ陶器の壺を神體とする社もあつたと記憶する。更に同じ國安藝郡秋津村の八王子宮の如きは、大昔異光を放つて此里の海邊に流れ着いたと云ふ一箇の石塊と共に、「もつく」と稱する漁民の食物を容れる器具を齋き祀つて居た。始めて神を勸請した村人の裔と云ふ者、代々神主

として仕へまつり、神實の「もつく」は其時靈石を奉じ還つた器であると傳へて居た（明治神社誌料）。川村杏樹は梓巫の漂泊生活に由つて、其の持つ箱の性質を説明せんとしたが、是れ或は本末の顛倒であつて、例へば伊勢の齋宮の第一祖が、箱の中の小虫から成長したと云ふ諸社根元記の舊傳の如き、多くの赫奕媛系の舊話などは、その由つて來る所を解き得ぬやうになりさうだ。唯近世の神輿と同源らしき「ほこら」と云ふ物の名稱が、神宮の「はこ」と云ふ語と因縁のあるらしいことだけは、（郷土研究、一の四五二頁）改めて爰に掲げて後の問題にする値があると信ずる。

三、御神體入換

文化の初年迄江戸で大に流行した例の池袋村の百姓助右衛門が家の天神と云ふのは、四五寸ばかりの箱であつて、是は釘付けにして開いて見なかつたと云ふことである。之に附隨して別に一箇の石あり、箱の神に祈念して後に其石を手に持ち、輕重に由つて神意を問

ふことであつたが、此の如く物が二つに別れて居ては相互の關係も分らぬ爲か、久しからずして信仰地に墮ちたと云ふ話である（遊歴雜記二下）。此よりも更に三百年の前、臥雲日件錄（二）に記す所の、巫女鈴御前が携へあるいた方五六寸の箱の如きは、神意に反する場合には箱自ら手の中より落ちたと云ひ、又「箱の中に聲あり人語に彷彿す、蓋し神此中に託するか」ともある。或は酒を欲するにより箱を開いて密かに之を進むるに、能く一升を飲み盡したともある。箱は固より平人の眼には事も無げに見ゆる故に、常に此種の奇瑞を繰返すか、然らざれば嚴重なる神秘を保つて、始めて其靈驗を信ぜしむることを得たことであらう。田樂に由つて人に知られた常陸金砂山の明神に在つては、其七十二年目毎の大祭に、深夜に海際の御旅所に於て、神體入代への式と云ふが行はれた。此御神體は一箇の生きた鮑あひぢだと云ふのが近代の言傳へで、乃ち鮑形大明神の神號もあつた。壺の中に潮を湛へて其中に七十二年の間齋き祀り、七日の大祭の中日の夜、神輿に奉じて濱に下り之を海中へ返し奉れば、必ず新たに海上より浮び來る鮑あり、之を取上げて同じ壺に請じ入るゝ

とあつて（譚海八）、如何にも信じにくい説であるが、而も其壺は往々開き視ることもあつたと見えて、壺の中の潮の減少に伴つて世中が悪くなる故に、大祭の日を待付けて新たに潮を満たし、以て禾穀の豊稔を期するのだと言ふのは、則ち自分等が想像して居る古い魂宮の思想であつて、雲州日御崎の名高い祭との異同は問はずとも、國々に至つて例の多い濱下りと稱する神の行幸が、本來無意味なる賑かして無かつたと云ふことだけは推論せしめ得るのである。

浦島子の玉手箱は萬葉の歌には「玉くしげ」とある。熊野新宮や香取等の大社では、御櫛くしげは既に久しい前から神寶目録中の一色目で、紅粉や髪飾などの婦人調度と伍を爲して居るが、果して櫛の字を充て、正しいか否かを知らぬ。「開けてくやしき」の類話は南海の果にもある。即ち八重山大濱の崎原神、俗に新神とも稱する祭り嶽かきは、昔時晝捲伊と云ふ農夫兄弟、薩州坊津に航して白髪の老翁より授けられた箱の神である。洋中に於て開くなかれと戒められたるにも拘らず、其禁を破つたら忽ち逆風に吹戻されて、再び前の港に著

いた。内に一物を見ざりきとある。二度目に貰つた箱は其儘我島に持還り、伯母小妹と共に之を開くに、神乃ち其女に憑つたとある（遺老説傳二）。是だけ十分なる驗應を見せてこそ、空しき宮の中に在る者を確認し得るだらうが、固より屢すべき出来事では無かつた。凡人の情として風や潮水だけでは頼無かつたあまりに、假に其中に夢の鮑あなや小さな蛇を住ませたとすれば、是やがて末法の信の衰へを意味するもので、之れに由つて「あにみずむ」の原始形態を窺はんとするのは恐くは無理である。唯此と同時に、些しく思を馳せて見ねばならぬ一事は、前にも見る如く魂宮必しも板を合せた四角な器のみで無く、又靈ある動物が自在に其形を大小にし得ることを認めるとすれば、様々の「うつぼ」なる物の中でも、比佐古は最も自然にして且つ居心地のよさうな魂の宿りであると云ふ點である。かの祇園の祭を過ぎての胡瓜には、蛇が居ることがあるから食つてはならぬと云ふ俗傳の如き、稀には我々の觀察にも遭遇し得さうな事であつて、七十餘年鮑が一つの壺の中に生息するといふなどに比べると、事實上の基礎に於て遙に強力なるものと言はねばならぬ。

四、猿の皮の鞆

自分は以前山島民譚集の卷一に於いて、河童が馬を引込まうとして常に失敗し、怠状を立て、將來災を爲すまじき約束をしたと云ふ諸國の昔話が、猿を以て厩舎の守護とした東亞一帶の古習俗に起因するであらうと云ふ證據に、狂言の鞆猿の趣向と、越前萬歳の宇津保舞がもと厩安全の祈禱であつたこととを擧げたが、而も何故に宇津保が其様な禁厭又は祈禱に効があつたか、其時はまだ之を言ふことが出来なかつた。依て此機會に今一度順序を立て、考へて見ようと思ふ。先づ第一に「うつぼ」と云ふ語の本義は内空虚と云ふことである。木の「うつろ」を「うつぼ」とも謂つた例は、古事談四六角堂觀音の條などにある。獨木舟をうつぼ舟と謂ふも之に基き、箱桶の堅なるをうつぼ柱と謂つたのは（新野間答）、既に平家物語にも夫木抄にもある。禁中では葱をうつぼと呼び（海人藻芥）。職人盡の歌にも之をうつぼ草と詠んで居るのは、此物の葉の形であらう（諺語大辭典）。武家で箭を納れ

て携へる「うつぼ」の同じ理由に起因することは、物を見れば一目でこれを認め得る。而も此器具の始原は多分中世である。鞆の字の正しい訓は「ゆぎ」である。「うつぼ」は八幡太郎笹の箱を見て作り始むと云ふ説（倭訓栞）は疑はしいが、而も義家、義光の時代から武器の盛に用ゐられたらしい證據はある（古今要覽）。此「うつぼ」に對して鞆の字を當てたのは、童蒙頌韻などの時代からであらう。問題は「うつぼ」と謂ふ名だけが後で、此形狀の武具は其前から有つたのか、はた又名も物も共に八幡殿の頃に起つたのかで、自分としては決定に難いが、元來此器の必要は矢賦りの爲など、云ふよりも、一度に澤山の箭を携帯し且つ羽の部分を損ぜしめぬ用意であるらしいから、少くとも武人が遠國に往返することが盛になつて後、大に用ゐらるゝに至つたらうとは言ひ得る。或は又狩の爲に山に入るには便宜だから、田舎では夙々から行はれて居たと言ひ得るかも知れぬ。而して其「うつぼ」には獸の皮を掛けたのと然らざる物とあつて、前者のみを騎馬うつぼと稱へて居た。猿の皮の他には猪なども常に用ゐられ、足利時代の末迄も京都に「うつぼ」屋と云ふ特殊

の工人あり、猪の革を納めるのは例の河原者の公事であつた(言繼卿記)。さばかり實用ありとも思はれぬ獸の皮に、特段の工作を費したのを見ると、最初は或は信仰上の動機に出でたのかも知れぬ。驟つて能の狂言の靱猿に、單に馬の祈禱に猿を舞はしむる爲ばかりに、大名の無理難題を靱の皮の所望に持つて行つたのは、どうしても初度の落想とは考へられぬ。多分は猿其物の外に「うつぼ」と云ふ品にも縁起乃至は呪術の力があつて、之を以て靱の祭等を行つたのが越前宇津保舞の名の起りであらうと思ふ。實際又野大坪の萬歳には猿を使つた歴史は無いのである。若し假に此物が専ら箭を盛る器となつて了つた前に、内空虚なるが爲に既に神を祭るの用に充てられて居たとするならば、是も亦靈の宿りとして、昔の人の眼には、似つかはしく感ぜられた結果であつて、頼政が退治した鶴の如き妖怪、其他、色々の不祥を「うつぼ舟」に載せて海に流したと云ふ口碑と、一本の筋を辿つて其由來を問ふべきものである。庶物の常の性と反して空を翔るもの、靈と認められた如く、水に入れても沈まぬといふ一事、先づ以て此物の力の不可思議を驚かした時代が、曾ては

一度我々の中にもあつたかも知れぬ。

豊前と傳説

小倉郷土會講演

一

私たちの學問も、今日の御時世の影響を受けて、何か現前の實益を期待せられて居る様な氣が常にする。殊に聴衆が忙しい教職員であつたりする場合には、或は彼等を道樂に誘ひ込んで居るかの如く、人から見られはしまいかといふ懸念があつて、つい堅苦しい問題の方へばかり知りつゝも今までは傾いてゐた。ところが小倉の郷土會だけは、他の地方の同種團體とちがつて、比較的自由な人が會員に多く、それにどうやら最初は趣味の集まり

から、成長したものゝやうに見られる。其爲に自分も心置き無く、どんな話をしてもよいつもりで、一つ取つて置き傳説に就ての意見を、述べさせてもらはうと思ふ。是とても無益な又人生に適切でない問題だと思つて居るわけでは更々無いのだが、ただ効果が今明日に顯れて来ないといふだけは仕方がない。さうして又さういふ種類の研究も、後代の爲には缺くべからざるものである。

民俗學の歴史は、他に書いたものもあるから、詳しくはこゝに説き立てないが、先づ大體にどの國でも、所謂有階級の閑題目を以て始まつて居る。それが此方法ならもつと汎く應用が出来る、言はず意外な自分の能力に心づいて、追々と活躍の範圍を擴げて來たのである。一方學問が對世間の價値を問はれるやうになつたことも、日本などでは著しい近年の變化であつた。私は決してそれを歎きも愁ひもしないが、とにかくに自分の眼前に於て、あらゆる人文學徒の態度はくるりと一轉した。學問の爲の學問などいふ言葉は、公然と之を口にする人が無くなつた。何かさし當りの目的をもつた本ばかりが世に出

て居る。以前は手短かに言へばずつと悠長だつたのである。だから民俗學の方面でも、傳説の研究などは、今ではもう之を省みる人も尠なくなつたが、曾ては少しでも前代生活に興味をもつ者ならば、一應は皆是を問題にして居たのである。日本で一番早く始まつた研究で、しかも最も遅くまで成績の擧がつて居ないもの、是が傳説のかはつた一つの特徴である。今一つの特徴として、是非諸君に説いて置きたいのは、日本が傳説の異常に數多い國であり、又恐らく他の民族では見られない程度に、それが發育し且つしつゝある國だといふことである。「傳説がまだ生きて居る」斯ういふ言葉を私たちは折々使ふが、少なくとも維新以後、なほ引續いて流傳するだけで無く、追加改訂解釋補充等、あらゆる複雑化を重ねて來た國は、よそにはさう多く無さうに思はれる。是が時代の風潮に動かされて、はたと其考察を閉鎖せられるといふことは、惜しいといふ以上に、もつと重要な結果を生じて居るかも知れぬのである。

二一

問題を此土地と傳説との關係に限局する必要があるので、豊前が二つの大きな島の渡り口に在つて、昔から人の出入の特に繁かつたところから、こゝに芽を吹き根をさした傳説の數多く、且つ千變萬化であらうことも想像し得られるに拘らず、それが久しい以前から片端づゝは人にも知られ珍重せられ、しかも綜合した研究の、我々の智慧を養ふに足るものがまだ現はれぬことは、殆ど全日本の縮圖とも云つてよい。今の郷土會の諸君の新たなる用意が、どれだけまで此状態を更新し、如何なる未知數を展開し得ようかといふことは、冷淡なる傍觀者にもなほ興味がある。まして私のやうに大いに遣つてもらはうといふ下心で、實は此話をする者にとつては、此地が一つの手本となつて、末々斯邦の文化史の隠れたる一面が、たやすく何人の眼にも映するまでに、明るくなつて來る日さへ夢想し得られるのである。

或はまだ知らぬ方もあるかと思ふが、福岡縣では前年佐々木滋寛氏の勞作によつて、筑前一國の傳説集といふものが公けにせられて居る（最近には又その増補版が出た）。此書は一半は續風土記以來の前代記録を拾輯したものだといふことで、従つて今は既に消え又は改まつたものもまじつて居るのであらうが、それにしても非常な數であつて、しかも其傾向は大よそ定まつて居る。たとへば神様又は偉人が、杖を立て小枝を挿したのが成長したといふ老木、人の手の痕足の跡を残してあるといふ大きな巖石の類、關東奥羽の果にも其例に乏しからず、こゝでも一つや二つは記憶して居る者があるといふ傳説は、筑前一國の中にも亦屢々分布して居るといふことが、是を見ればよく判る。各自の土地の人は相知らず、二つあるなら向ふが間違ひ位に今までは思つて居たのが、さういふわけのもので無いことだけは、此書によつて多辯をまたずして明かになつたのである。單なる比較だけでも既に一つの啓發であつた。それから今一つ、今度は南隣の方には豊後傳説集といふものが出て居る。是は市場直次郎君などといふ我々の同志が、學校の生徒たちの集めて來たものを整

理したので、全部が所謂同時採録だから、數に於ては稍劣るが、比較の意義は一段と深い。残念なことには地域が限られて居るばかりに、豊前の人たちは斯ういふ本の出たことも心づかず、知つても必ずしも是に注意を向けようとせられない。方言集などにはよくあることだが、外部の人々は、やゝ近い二地の採集が公表せられると、其中間地帯はもう類推してしまはうとする。双方何れかの色彩に塗るか又はぼかしに見るから、愈々その特色は埋もれやすいのである。正直にいふと豊前は聊か立ちおくれた。是を此まゝにして又何年か過ぎたら、或は隣にかぶれて我郷土だけに在るものを、氣付かぬ様にならぬとも限らぬが、今ならば是も却つて刺戟であり、又一段と廣汎にしてしかも細密なる比較に、興味を引寄せる機縁でもある。傳説の研究をよい道樂だなどと謂ふのは、決して奥底までも見て還つた人の言葉でない。私も實はまだ詳しいことは知らぬのだが、果してどこ迄も世用皆無、人の社會と交渉の無いものであるか否か。五人や七人は今日の日本にも、是を究めようと試みる者があつてもよいと思つて居る。

三

同じ一種の傳説が少しづつ趣をかへて、廣い國內の隅々までも分布して居るといふことは、どこの國でも見る現象で無く、従つて又何でも無い事實ではない。流傳であるとするれば中心がある筈であり、又移動して行く力があつた筈である。至つて古いものならば久しい相續が推測し得られ、近世に始まつたとすれば運搬者の大きな旅行が想像せられる。それが歴史の書に載せられて居らぬといふことは、即ち亦記録以外に、我々の知るべき歴史があるといふことを意味して居る。それを現存の傳説の方から、逆に遡つて探つて行く方法は無いものかどうか。斯ういふ點が先づ我々の問題になつて來るのである。今日判明して居ることはまだ多くはないが、私が茲で安心して諸君に語り得るのは、傳説は曾て一たびは事實あつた事として信ぜられて居たもので、従つて案外にこしらへものが無いといふことは是が一つである。第二には外國で傳説といふものは、今は信ずる人も無く、單に前代

に斯ういふ事を信じて居たと語られるだけである故に、其性質はよほど説話と近く、形がほど固定して、誤聞と忘却以外には變化の折が無いに反して、我邦には一部にさういふ傳承者もあるが、他の大部分は今でも信じ、もしくは信ぜんとして居る者であることである。其結果として、父祖以來の傳説を、出来るだけ信じやすい形に改造しようとする、意識した又は無意識の努力が絶えない。即ち傳説はまだ生きて居るが故に、始終成長し發育して居るのである。是を學問的に觀察しようとするのは、一種の生體解剖のやうなもので、時としては許されず、又は敢てするに忍びない場合もある。それで歴史との混亂も起れば、ひいては政治上の交渉を生ずることも稀でないのである。面倒といへば相應に面倒だが、この複雑さに社會的意義があり、同時に之を詳らかにする仕事の、實際の價值も含まれて居るわけである。

それからなほ一つ、傳説の生きて育つて行くやうな土地には、折々は又新たに生れもする。近頃はもう教育が變つたから、よほどの作爲が無いと新傳説は起らぬが、以前はごく

自然に、知らぬ間に可なり奇抜なものが現はれ、それが在來のものと同肩を並べ、同じ待遇を受けて流布して居る例が多かつた。従つて我邦の傳説には、年齢の無数の階級があり、その發生の起因に就て分類すると、幾通りものちがつたものが、此の中に包含せられて居ることが判つて來る。是なども確かに亦特徴の一つであつて、外國から來て觀る人には見つからずとも、同じ國語の感覺の中に住む國內の學徒だけには、早晩理解せられて傳説の性質、是が數千年の人心を左右した機能を、明瞭に世に説くことが出来るやうになるかも知れぬのである。どんなものかといふことを碌に知りもせぬうちから、つまらぬとかつまるとかいふ論を、闘はして見た所が始まらぬ話である。

四

故に自分もいゝ加減に理窟を切上げて、寧ろ實地の例によつて諸君の關心をひくことにしようと思ふ。九州は前年一巡りした時から心づいて居たことだが、やはり他府縣と同様

に、弘法水もしくは御大師井戸といふ傳説が非常に多い。昔破れた法衣を着た旅僧が、ぶらりと遣つて来て水を飲ませてくれといふ。それを快く承引して、わざわざ遠くへ行つて汲んで来た善心の女の村に、新たに好い清水が湧き出し、すげなく断つたといふ土地の水は、今でも甚だ濁つて居るといふ風の話が、いやしくも古來名水の聞えある泉には、必ずと云つてもよいほどに何處にでも傳はつて居る。是が紀州の高野の山で、開祖大師は死後までも毎年國々を巡つて居たといふ語り傳へと、相呼應することは確かであるが、考へて見るとこの嚴峻なる信賞必罰の態度が、第一に佛道の高僧らしくない。さうして餘りにも同じ奇跡が多いのである。杖とか樹の枝とかを地に突立てたら、見る／＼清き泉が迸り流れたといふこと、及び水を與へた者が女性であり、多くは布機を織つて居た點も、何かわけが有りさうに思ふが、それよりも注意せられるのは、到底弘法大師の行くことが出来なかつた土地にも、尙且つ同種の口碑の歴然と遣つて居ることである。たとへば沖繩本島の二三の邑に、古い清水の由緒として説くものは、單にある尊とい旅人神の話となつて居る。女が土の

碗の縁を一とこ打欠いて、そこは私が日頃口を付けた所ですから、外のところからお飲み下さいと謂つたら、神様が此上もなくその敬意を悦ばれたといふことは、古い記録にもあつて有名になつて居るが、大師と最も縁の深い四國の或土地にも、全然同じ傳説があつて、是は最明寺時頼の徵行の際の出來事だとして居る。其方が此場合には一段と似合はしかつた爲であらう。私の推測では、北條時頼などは勿論のこと、話は僧空海の世に在りし時代よりも更に古く、かの常陸風土記の富士筑波、もしくは備後風土記の逸文にある蘇民互且の兄弟が、神を待遇するに冷熱の差があつたといふ舊記と、その系統を同じくするもので、たまく世に知られた後代の偉人の名が、是に織り込まれたに過ぎぬものと思ふ。

全國の互ひに相通はぬ村々に、百を以て算へられる同種の口碑が分布してゐる事は、それを其住民等が袂を分たぬ前から、既に持つて居たものと見なければ説明は先づ六つかしい。今までは單に列ね比べて見る機會が無いばかりに、それ／＼に別の一つの事實であつたと、信ずることが出来ただけである。しかも採集の結果によつて、將來判明すべき點は

まだ此以上にも多い。第一に斯くばかり長い歲月の間、よくも忘れもせずと同じ故事を、爺婆から孫へ引傳へたものだと思ふと、是にも可なり有力な根據はあつたのである。我々のすべての傳説には、必ず何等かの記念物を伴なうて居る。是を視る毎に必ず憶ひ起し、又いつ迄も忘れまいとしたと共に、是によつて自分たちの語る所の、眞實なることを證據立てようともして居たのである。だから豊かなる流れに汲み、もしくは次々に井を穿つて、自在に水の恵みを得る土地では、泉を重要視せぬ故にこの傳説は残り存せず、却つて別途のやゝ珍らしい現象が、是と同系の口碑によつて説明せられて居る。東日本には數の多い石芋・喰はず芋などは一つの例である。葉の形が里芋とよく似て、全く食用にならぬ一種の植物の茂つて居る土地では、昔弘法さまが來て芋を一つくれと言はれたのに、物吝みの男がこれは固くて喰はれませんと答へた。さうしたら其以後芋が皆斯んなものになつたといふので、安房半島南端の青木の芋井戸などは、二つの傳へが合併して、今でも井戸の傍にこの喰はず芋がうんと生えて居る。泉の由來に比べると、芋の話の方は幾分か限地的であつた。九州の島にも絶無ではないか知らぬがそれよりも多く聞くのは大根川の傳説である。昔里の女が川で大根を洗つて居る所へ、大師が遣つて來て其大根を所望せられた。是も惜んで與へなかつた御腹立から、毎年其頃になると川に水が切れて、大根を洗ふことが出来なくなつたといふので、此話は九州に澤山ある以外、自分の知る限りでは、福井縣の若狭に一つあるが、他ではあまり耳にしたことが無く、たゞ東北の端へ行くと、是を舊曆十二月九日の大黒祭に、二股大根を供へるいはれとして、説く者があるだけである。此方は至つて心のよい女だつた。主人の大根だから進上することが出来ず、幸ひ一本だけ二股のものがあつたから、それを打欠いで與へたといひ、大黒は餅をたべすぎて胸が焼けて困つて居たのが、半分の折れ大根を貰つて食つて、氣分がよくなつて大いに悦ばれた。それ故に今でも十二月九日には、同じ二股の大根を供へて、福を禱ることになつたのだといふやうに傳へて居る。豊前豊後の地方的變化の中には、多分この大黒様もしくは弘法大師を、仁聞菩薩とさしかへたものが、幾個處にもあるだらうと私は想像して居る。話せば長くなるが、この仁聞

菩薩も實は頻りに國巡りをしたまふ神であつた。さうして豊の二州以外には、めつたに踏出されたことの無い御方であつて、我々には殊に意義が深いのである。寺々の縁起に録したものは、多くは實在の名僧と解して居るのだから、さういふことも言はぬ様だが、もし直接に農村人の口から、諸君が採集せられたら氣付かれるであらうと思ふことは、此菩薩がしばしば道の辻に出現して、赤兒を助けられたといふ點で、是も數多くは他の地方に行はれて居ない。栃木縣の足利附近にたゞ一つ信心深い女性が或泉のほとりで、弘法大師の恵みによつて、小兒の夜啼きを治して貰つたといふ言ひ傳へがあつて、今も其清水だけが記念として残つて居る。是とよく似た口碑は此地方ならば、決して稀でない筈である。

五

しかし諸君はなほ訝かしく思はれるであらう。村にたつた一つの早魃にも涸れぬ清水、石芋喰はず梨水無し川の不思議、乃至は松葉に火を點じて夜泣きする兒を照らせば、泣き

止むといふ靈木の松などがあれば、成程それは大切な記念物に相違ないが、それなら銘々に別の由來があつて然るべきである。古い一種の傳説が到る處に、分れて獨立して爰ばかりといふ顔をして、附いて居るのがやはり不可解だと言はれるであらう。如何にも遠い昔の世のことだから、確實に斯うだつたと言ひ切ることは出來ぬが、考へて見やうは幾らもある。單純な人の心に先づ浮ぶ想像が、同じ民族なるが故に各地ほゞ一樣であつたかも知れぬし、至つて幽かなる無意識の記憶が目覺したのかも知れぬし、之を思ひ出す地位に在る者に、定まつた傾向が豫てあつたのかも知れない。又一つの記念物の印象が強くなつて、新たに傳説の要求が起り、迎へて聴き喜んで信じようとする者が多くなつたかも知れぬのである。たゞそれを決するが爲には、更に一段と親切なる考察を要するだけである。私の觀る所では、古く傳説がさういふ事情の下に、或は移動し分立しもしくは出現したものならば、その同じ作用は後世新たに生れたものにも、或程度までは認められなければならない。各時代の智能の差は無論計算に入れるとして、少なくとも今ある新たな傳説の生れ方や

生長のし方は、一部分大昔にもあつたものと認めてよからう。是には日本の如く今でも眼の前に傳説の育つて行く國、活きて若々しく働いて居る國は、よほど研究の便宜が多いわけである。

是も實例によつて御話をすると、福岡縣では企救郡の北端、即ち現在股賑を極めて居る筑豊の境界線に近く、幾つかの十三塚といふものがある。既に損壞して僅かに地名を存するものなど多いことと思ふが、是は全國の諸府縣にも同じものが多いので、幸ひに名の起りだけは先づわかる。所在は最も普通に二つの郷莊の境で、古い道路などに沿うて塚が十三基、一直線に併立して中央の第七番目のものだけが特に大きい。二三の發掘の實驗では、中は只の盛土であつて棺槨等は無く、稀に小形のカラケが出る。始めてこの遺跡の性質を解かうとしたのは、私の知る限りに於てはやはり貝原翁の筑前續風土記であるが、其説即ち人の死後十三度の法事に、一つづつ築いて行つたのだらうとの意見には證據が無く、しかも當時まだ知られなかつたらうと思ふ二つの事實は、この十三塚が九州の地は素

より、北は關東東海北陸奥羽にかけて、其分布の個處が百を以て算へらるゝことゝ、是と殆どちがはない十三基の境の塚が、内外蒙古の各地にも、何れも交通路に近く見出されて居ることである。考古學者の領分かと思ふから其起原に就ての自分の考へは茲に述べないが、兎に角に中世以後のものと思はれるに拘らず、是を起した趣意はもう全く忘れられ、その代りに色々の傳説が生れて居るのである。小倉の周圍にももしあるならば、黙つて現存の言ひ傳へを聽取つて置いて戴きたいのだが、是は比較的新しい記念物であるだけに、其傳説にも若干の新味がある。東京の周圍は實は全國中でも殊に十三塚の多い地方らしいが、自分の今記憶する二つの例をいふと、北部では尾久の荒川沿ひの原野に以前あつたものは、此地の領主豊島左衛門尉某の姫が、川向ふの何とかいふ武士に嫁入して、いちめられて還されて来る途中、悲しんで大川に身を投げて死に、その十二人の腰元が、共々に姫のあとを追うて同じ流れに沈んだ。それを引揚げてこゝに埋めたといふことになつて居る。一方は市の南部、自分の住宅に近い世田谷の若林邊にあつたものは、是も今は全く市街の

人の浪に蔽はれて居るが、世田谷舊記などいふ江戸後期の著書には、花やかな一つの傳説として書立てられて居る。昔世田ヶ谷家の殿様の愛妾常磐、十二人の同僚に嫉まれて讒言を受け、無實の罪の爲に虐殺せられた。それが程なく悪巧みであつたと知れて、十二人の妾も悉く刑に遭ひ、常磐の墓を中心にして一列にこゝに埋められたといふので、あんまり空々しいから一部分は筆者の作りごとかも知れない。何にしても土地が江戸の傍であり、時代が近世である爲に、芝居錦繪や合巻ものゝ影響は可なり著しく感ぜられる。ところが田舎の十三塚には、此様な艶めかしい傳説は到底向かない。だから多くの場合には曾て其附近に行はれたといふ戦争に、常に十三人の武士と一緒に討死したことを謂ひ、時は天正十何年といふやうに、古い軍書によつて命日をきめ、安房の十三塚などにはいつの間にか人名までも判つて居る。九州の同名の塚にも、別にはと似たものが幾つか有る事と信ずる。然し是などは何れも塚が埋葬以外の目的の爲にも、屢々築かれるといふ習俗を忘れて後、即ち石工が入つて來て手軽に供養塔などをたてるやうになつてから、次第に完成した傳説

といふことがほど明かで、たゞ是一つからでも年齢の若いことがわかる。人はめつたに塚などに手を掛けなかつたけれども、一たび發掘して見たら、直ぐにも正誤をしなければならぬ傳説であつたのである。しかも塚と墓とは同じだと思ひ、野外に寂しく埋められるのは、多くは非業の死を遂げた人々だといふことを知つて居た者には、期せずして各地大よそ同じやうな言ひ傳へを、發生させ又信ずることを得たのであつた。それには一と十二といふやうな數の感覺も手傳つて居るかも知らぬが、とにかくに斯ういふ尋常でない數と排列との塚の群を持つ土地では、言はゞ傳説の需要が大いに有り、従つて容易に或小數者の空想の言をも信じ得たのであつた。是が近世の一つの世相だつたとすれば、もつと古い上代の、他に考へる問題も少なかつた社會では、更に一段と熱烈に、さういふ傾向を支持して居たらうことも察せられるのである。

六

但し近世の傳説は、必ずしも常に其様な單調なものゝみで無く、中には若干の強ひて奇を好んだものもまじつて居る。たとへば仙臺領のやゝ古い地誌、封内風土記といふ書には、次の様な話もある。現今は既に失はれて居るかも知れぬが、平泉の舊跡から東の方に當る山の嶺に、あの頃は十三個の立石が竝んで居た。是も十三塚と同様に中央の一つだけがよほど大きく、左右の十二個はみな小形であつた。是を説明する傳説としては、昔中尊寺に法會の田樂のあつた日、一人の和尚が十二人の小坊主をつれて、どこからか見物にやつて來た。漸う此山の頂上まで辿り着いた時に、田樂はもうすんでしまつたと人の謂ふの聞いて、さうかと言つたきりで茫然とそこに立ち盡した。それが其まゝ此石になつたのだと傳へて居る。少し前こゝみに平泉の方に面して、竝んで嶺通りに立つて居る石だつたと云ふから、多分は是も十三塚と、もとは同じ目的で置かれたものだらうが、誰が斯ういふ物語じみた、しかも若干のユウモアさへある由來談を案出したものか。少なくとも只の麓の里の里人の空想には、自然に浮んで來さうにも無い一趣向であつた。

さうして又氣をつけて行くと、日本には斯ういつた種類の可なり奇抜な傳説も、亦相應に諸方に現はれて居るのである。其一つとして、諸君の今後も遭遇せられるであらうと思ふのは、豊前には香春の山の城址を始め、たしか尙一二箇處はある白米城の傳説である。是が奇抜な割には分布の弘いもので、私が前年來心を留めて算へた見た所では、現在既に二十二三府縣に互つて、六十ばかりの類例がある。昔或山の上に在る城が敵に攻められて、水の手を絶ち切られた。籠城の大將はそれに苦しめられる様子を見せまいとして、崖の端へ馬を牽出して白米を以て盛んに馬の足を洗つた。遠く寄手が之を眺めて、何だ此城にはまだあの様に水があるのかと騙されて引揚げて行つたといふ話の筋である。支那にも是と半分似た話が古くから、書物に載せてあると謂つた人もあるが、それを御互ひの先祖が讀んで知り、眞似てこしらへたか否かはまだ斷言できぬ。しかも是だけの事實が六十餘處に一々實現したものと認められぬは勿論、甲乙丙丁互ひに無關係に、偶然に一致した空想とも想像し難いのだが、個々の地元に於ては今なほ我處のものを歴史と信じ、よそに在るも

のは何かのまちがひか、又は剽竊だらう位に思つて居る。又さうでも見るより他には、別に解説のしやうも無かつたのである。新時代の協同採集と比較とは、到底其様な處理法で満足することを許さない。是には何かもう一段と底の原因が無くてはならぬのである。自分の意見は前年發表して居るが是には特殊の運搬者の系統と、その大きな旅行とが推測し得られる様に、今でも尙思つて居る。平たく之を言ふと、語る者は必ずしも信ぜず、聴く者だけが眞に受けたといふ時代が、日本には暫らくあつたらしいのである。是は一つ／＼の白米城傳説が、引用して居る人の名と戦争の機會、及び始めて文筆に現はれたと思はるゝ個々の時期などを、詳しく調べて見たならば明かになるかと思ふが、此出來事は何れもさう大昔のことゝは考へられず、大體足利末期の所謂戰國時代に、あつたものゝ様に説かれて居る。つまり現實に一つでもそんな事件があつたら、すぐに評判になつて又白米ぢやないかと、却つて寄手を用心させ得た時世の話なのである。それが僅かの風説半徑をはづれると、そこにも茲にも竝立して信ぜられて居たといふのは、要するに生れが田舎であり、傳ふる者が

交際の狭い農民であつたことを意味して居る。自分の心づいたのは、此種の口碑のある土地が、嶮岨な山の上で、幽かなる人工の跡があるのみならず、其半分近くまで、そこに燒米の落ちこぼれたものがあることが一つ、今一つは斯してうま／＼と敵を欺き退けたにも拘はらず、結局その謀計が見破られ又は密告せられて、城は落ち城兵は討死してしまつたとなつて居ることである。戰跡の地の凄愴陰慘なる光景は、今は既に印象も薄れたけれども、其頃の人には怖ろしいことばかりで、それが色々と民間の俗信に影響し、拭ひ去り難き不安の種となつて、妖怪や祟りの沙汰は永く續いて居た。遷例は祭典供養を營んで、目に見えぬ亡魂を慰めるのであるが、それにも物知り口寄せの力を假りて、豫め埋もれたる事件の顛末を知り、少なくとも祀らるゝものゝ名を、知らなければならなかつたのである。即ち別の語でいふと、以前我々の間には不審なる記念物、いはれを問はずには居られない奇怪な事實が、今よりも遙かに多かつたのである。私等は是を傳説の需要又は空隙と名づける。この缺乏を充たす爲に、一種の信仰的解説者が、天下を横行して居たことは、記録にも幾多の證據があ

る。彼等の素養は限られ、しかも修業によつて練達し、其一部は世の變化につれて、次第に其技能を遊藝化させて居る。一つの稍珍しい説明ぶりが師匠から弟子へと傳授せられ、地方に持廻られた例は他にもある。肥前や日向で異常に發達した和泉式部の物語などは其一例である。個々の土地の者はまだそれを文藝だとは知らぬから、昔の習ひに聞いたまゝを、古人の亡靈が口寄せの口を借りて、告白した事實と思つて居たらしいのである。傳説には今でも固く信ずる者と、そんな話もあるかとたゞ珍らしがつて聴く者とがある。兩者の交渉は時代によつて大いに變つて來たが、必ずしも常に双方一つの水準の上に居て、是を授受しようとせぬ例は最近にもなほ多く認められる。この白米城の話とやゝ似た様な流布形態は、或は上世にも少しはあつたので、それで我々の傳説には、變つた面白いものが時々はあるのではないかと思ふ。

七

是を簡単に授受者双方の、智能の差と解する事は誤謬かも知れぬ。職業的巫覡が物語の種を求めて、次第に花やかで又哀れなる若干のテーマを採擇し敷衍し、努めて感興を高め又聴衆の意向に投ぜんとしたのは、彼等の利害からであらうが、相手の方にも亦相應に積極的な注文はあつた。例へば記念の石なり樹なり、深い洞とか塚とかの在る部落では、隣の村の者よりも比較的牢く信じ、又いつ迄もそれを守つて居た、うそだと言はれると不快に思ふ感じも強い。同じ一つの里の中では、寄留や新宅の者より、舊家の方が熱心に之を説き、又之を疑ふ程度が鈍い。是を歴史では無いといふと、それに關聯して不確かになつて行くものが、餘りにも多いからである。娘が大蛇を掣にして、池の主になつて居るといふ家が池の上に在り、又は仔細あつて下女を手討ちにし、それが祟つて困つたから祀つたといふ若宮の祠を、家の屋敷神にして居るものもあれば、もつと極端なのは旅の六部を一泊させて殺し、それから金持になつたといふ例さへある。何れも新たに虚構して、わざわざ評判させて置く氣遣ひの無い傳説だが、父祖何世と無く認めて來たものを、斷然否認する

といふことは當人には出来ない。そこで大抵は自分の方からは言ひ出さぬ程度にして置く
と、周囲が中々之を忘れてはくれないのである。是を眞實に我家の歴史だつたかと思つて、
内心悲しんで居る若主人もあるか知らぬが、私などは是を全く餘計な苦勞だと考へて居る。
是は人間の感情が今のやうに繊細でなかつた時代に、専ら精靈の意力が強猛であり、それ
と我家とに特殊の關係のあることを思つて居た人々が、何か機會があつて信じ始めたこと
が、偶然久しく傳はつて居たゞけで、寧ろ遠祖の生活ぶりを知る爲の興味ある一つの手掛
りであつた。それを今日の知識なり趣味なりに照して、批判をしようとするれば爐上の雪の
如く、跡方も無く消えて行く性質のものだが、折角残つて居るものを其様にしまで、急い
で棄てしまふにも及ぶまいと思ふ。其代りには一方に、非常に村や家の爲に都合のよい
傳説でも、やはり傳説だといふことを記憶してかゝらねばならぬ。ところが世にはさうい
ふ方面の言ひ傳へを強く主張し、或は勝手に氣に入つた部分だけを抜き出し、甚だしきは
若干の改訂増補を敢てして、最も信じ易い形にして世に誇らうとする者が屢々あつた。江

戸期の始め頃から盛んに文書化した社寺の縁起は概して是で、それを或者はうそも方便な
ど、謂つて黙認して居たが、縁起は其積りで我々も見て居るからまだよろしい。個人がそ
れを試みたら方便ですらも無いのだが、是には亦已むを得ない別の動機があつた。しかも
今日の人は多くは其策動に參與せず、たゞ何時からとも無く我家でさう傳へて居るから、
自分も受繼いで牢く信じて居るといふ場合が多いのである。

傳説の意識的改作、もしくは自ら信ぜざる者の發案といふことは、是もさう古い時代で
は無いらしく、假に古くからあつても發見することは容易で無い。今日誰にでも大よそわ
かるのは、やはり巡回の巫女や座頭と同じく、後から入つて來た移住民が、舊來の居住者
に對して、自己の立場を作る必要から、提出する由緒談の類である。九州にはやゝ例が尠
ないが、中國四國から東の山地に弘く分布して居る轆轤師、又は木地作りといふ職業の者
が、清和天皇の御兄皇子惟喬親王を開祖とし、其隨從者といふ多くの大臣や納言から、自
分等の家が筋を引いて居るやうに、口でも述べ書類にも書いて出して居るのは其一つで、

正直に之を信じて居る子孫の人には氣の毒だが、是は決して只の誤解では無い。しかも奥羽越後の一隅に行くと、彼等の言ひ傳へが元になつて、大變複雑した美しいロマンスが展開して居るのである。それから諸國の鑄物師の家に、丹南文書など、謂つて傳はつて居る舊記に、源三位頼政鶴退治の節、猪早太をして携帯せしめた鐵燈籠を鑄出した功により、諸役御免で諸國を巡業する云々といふ由緒なども、たとへ官邊に公認せられたことがあつたにしても、やはり作りごとであることは確かだが、此方は幾分木地屋のより古いかと思ふ。所謂當道の由來に、盲法師の祖神を雨夜王子とし、日向に大きな所領があつて全國の座頭を養つて居たなどといふ話も、或は歴史の如く取扱はうとした人もあつたが、紛ふ方なき人作の傳説であつて、たゞ後々此派の者が頑強に之を信じて居ただけである。斯ういふ種類の、新らしい史學とは妥協せず、時代の智能に應じて合理化しようともしなかつた傳説は、今となつてはもう批判も容易であり、従つて又人を誤解に導く處れも無いが、此他にまだ少しばかり、始末の悪いものが残つて居る。殊に何かといふと高貴の御名前を引

合ひに出して、自由な論議に向つて防禦線を布くものが、もしも單なる誤信では無くして、一部の利害に發足したこしらへものであつたとしたら、其迷惑の及ぶ所は我々だけでは無いのだが、それも現在の所では絶無とは言へない様子である。歎息すべきことだと私は思ふ。

八

是等と同列に論じては少々ひどいが、九州方面に特に數多い平家谷の傳説、平家の落人が來て隠れたといひ、時としては貴とい御方が、そこに御在住なされたと傳へて居る口碑なども、關係者の信仰が強烈であり、又往々奥底までの討究を重ねずして、輕々に歴史に化し易い點はほゞ共通して居る。但し此方は起原が一段と遠く、誰がどういふ心持を以て、そんなことを言ひ始めたかを、突き留めることが更に困難なのである。大體にどこの山奥海の果でも、比隣の村里とは縁の無い人々が、いつからとも知れずこつそりと入つて來て、靜かに住んで居たのは皆同じだから、是を落人の末だといふ迄は少し●うそで無い。それが至

つて僅かな手掛りや、今ならば人の認めない不思議の暗示によつて、自他ともに平家だと信じ始めたゞけだらうと思ふ。知識が一地區に限られて居た間は、争ふ者が無いから愈々確信が養はれる。たゞ今日の様に數十箇處の平家谷が現はれ、殊に貴人の御遺跡といふ處が、そこにもこゝにも在るとなると少なくとも一つ以外は皆虚偽といふことに歸して、先づ相互の間に激しい論難をかはさねばならぬことになるのである。この實際の不便不愉快を散する爲にも、是非とも傳説の問題を正視する必要がある。

中部以東の極めて意外なる平家谷でも、尋ねて見ると一通りの言ひ分はある。是は通例小松といふ苗字の家が古くからあつて、小松だから重盛又は維盛の子孫だといふことになつて居る様だが、その小松のマツはマウチギミ、即ち神に仕へる者といふことをしか意味しなかつた。小野小町の生地又は死處といふものが、全國に極めて多いのと同じ理由のやうに思ふ。それから一方南の島々に、平家が落ちて来て住んで居たといふ例は、壇浦から一續きの海だから幾分か誠らしさが多くなる感じはあるが、是とても一つを本當とする爲

には、他のすべての島々を作り事としなければならぬ場合が多い。奄美大島の北部には神祭りの古い歌があつて、附近の城址かとも見える岡の頂の靈地を、何のモリかれのモリと詠じて居る。それで行盛や資盛の居た證據だといふのだが、神に祭らずとも身分のある人の實名を喚び棄てにした筈も無く、又其名前のまん中へ「の」を挿む筈もない。寧ろ反對の論據といつてよいのである。其他の多くの場合にも、固有名詞の類似はすべて心もとない。元來がさういふ名を口にせぬのが、昔の禮儀だからである。全體に神と貴人とに對する尊崇の用語が、日本では昔から共通であつて、たとへば神の御子をも王子若宮、其御移動をミユキともイデマシとも謂つて居たのが、この誤解の根本かと思はれる。それに何處からとも知れず立退いて來たといふ記憶が加はり、又附近の常人に對する優越感があつたとすれば、わざ／＼作爲するだけの謀計は無くとも、平家や盛衰記の流行に乗じて、永い歲月には自然に平家谷の想像は具體化したのである。其上に或者は動かぬ目的を以て證據を捜しまはり、又時としては強辯を試みた。「だらう」が「である」に進化するのも時の

力で、子孫の忠實に之を信する者に、責任は些しも無いのである。

鳥取縣の或山村で私の見た古文書の寫眞は、紛れもない江戸中期の無學者のこしらへものだつたが、それを大切に持傳へて居た舊家の金持は、是を證據にした復興運動の爲に、却つて没落して行方不明になつた。豊後で前年菅原道眞の嫡流と信じて、男爵にはなれると思つて居た或門閥家なども、古武士の風格を備へた素朴なる老人であつたが、證據に持つて來た古器は蒔繪の煙草盆であつた。斯ういふ人たちに告げ知らせたいことは、靜穩なる僻地に數百年の連綿たる繁榮を續けた一族には、往々にして平家其他の史上人物の後裔だといふ傳説が、來て附著するものだといふことである。さうして此事實は些かでも家の不面目でない。寧ろこの進んだ御時世に生れながら、なほ頑固に信すべからざることを主張する方が、遙かに耻がましいことなのである。前に掲げた木地屋でも鑄物師でも、後から入つて來て是だけの地歩を占めるには、時代の水準を抜いた經驗と學問とを、もつて居たことは明かである。それが如何なる種類のものであつたかを、我々が知らうとするには

傳説はよい材料である。京都が兵亂の巷に化する以前、その周圍の豊かなる平野には、卜占祈禱の術を以て生を營んだ者も多かつたかと思はれる。これが少しく供給過多になつて、小さな群に分れて地方へ進出した跡は、現在の居住状態からでもやゝ判つて來る。小野といふ苗字の神主が多いのもその一つ、安倍といふ一族が構成した部落のあるのも亦一つの現はれである。安倍は關東でも貞任宗任の子孫だと、自ら信じて居る例が折々ある。これなどは今の考へからいふと、晴明の末だと言つた方がよつぽどよいので、わざわざ何も蝦夷の酋長を先祖にするに及ばぬのだが、前代の感覺は又別のもので、やはり武士の家だと思つて居る方が、山の中の淋しい生活にとつては、心の慰めが多かつたのであらうと思ふ。

九

この傳説が必ず記念物に附くといふこと、又記念物と見るべきものがあつて、しかたしな傳説の残つて居ない場合には、それに合せて後から傳説の生れ育つこともあるといふこ

とは、私の意見であつて外國の本からの受賣では無い。大抵まちがひは無いと心得て居るが、なほ諸君にも十分検討していただきたい。最後に附加へてもう一つ、二者の關係を明かにして置きたいのは、その又記念物が、傳説の成長して印象濃くなるにつれて、少しづつ變形せられて行くらしいといふことである。

斯ういふ相互作用の爲に、一段と研究が面倒になつて来るわけだが、是とても押へるかんどころの様なものを知れば、迷ふやうなことは無いと思ふ。一つだけ又豊前の實例を引くと、やはり香春地方に近い頃まであつたといふ水神祭の行事だが、私は同地出身で現在東京朝日新聞の社會部長をして居る尾阪與市君から聞いた。夏に入つて子供たちが重箱に御馳走をつめて川原へ出て河童の御祭をするのに、其重詰には笹の煮たのを入れて子供は盛んに食ひ、別に河童には竹を輪切りにしたものを供へる。是は先生が其竹を食はうとしても固くて咬めず、なんと人間の子供はきついものだ。此竹をあの通りむしやくと食べて居ると驚歎して、今後尻子を狙はぬ様になる爲だと説明せられて居るさうである。此

話なら多分知つて居る人もあるだらうが、中津では吉吾、豊後の野津市ではきちよむさんといふ滑稽人の逸話として、昔話中に傳はつて居る所と略同じい。吉吾は竹を煮て食ふ秘傳を教へてやると騙して、婆さんに散々饗應させてから、竹を煮るには先づ獅子の油を五合買つて來いといふ。そんなものがあるものかといふと、それでは残念だが竹は柔かく煮えないと謂つたやうな形になつて居る。もつと近い處では埼玉縣の秩父に「鬼と神力坊」といふ話があつて、「日本の昔話」の中にも載せて置いた。神力坊といふ山伏が鬼を客に招いて自分は笹を、鬼には竹を煮て食はせ、自分は餅を食ひ鬼には白い丸石を焼いて出した。流石我慢の鬼も人間の様に、こんな硬い物をうまさうに食ふことは出来なかつたので、爾來敬意を表して害を加へんと企てなくなつたといふのである。白石を餅と見せかけて山男山姥を退治したといふだけの話ならば、古く弘くまだ諸國に行はれて居る。信州のたしかアルプスの谷では、岩魚捕りなどの山小屋に獨り泊る者が山の魔物を避けるまじなひに、今でも爐の中に餅に似た小石を並べて焼いて置くといふ話も聞いたことがある。香春川原

の河童祭と共に、是は明かに一つの無形の記念物であり、傳説は之を説明する由來談であるが、この二つの何れが前に生れ、何れが後に出來たかは一言で決し得る。即ち傳説の方が昔話の影響を受けてまづ生れ、それを或は本當の事かと思つた者が祭の供物の式を改め、もしくは新たに白い丸石をまじなひに用ゐ始めたのである。河童といふ水の惟は、九州には殊に跳梁跋扈して居たが、是は本來の日本の信仰では無い。以前にはもう少し系統立つた水の神の信仰が有り、又もつと敬虔な畏怖と祭典とがあつて、是にも一通りの由來談が附いて居た筈であるが、それが新たな雜説の影響を受けて少しづつ變化する頃には、他方折角の記念物たる川原祭の行事も亦、斯様に子供らしくその供物の部分を改めたのである。原因は勿論これたゞ一つではあるまい。曾ては農民生活の樞軸をなしたかと思ふ水の神の信仰全般が、殆ど古い姿を尋ね難いまでに、日本ではもう變化してしまつた爲に、他にも色々のおどけた民間説話が、言はゞ其隙間を狙つて、この生眞面目なる領域にも入り得たのである。傳説研究の興味はそれによつて更に深くなつて居る。

十

そこで私の考へるには、獨り傳説の問題には限らず、多くの種類の民間傳承は、もう今までの様な悠長な趣味的態度を以て、ひねくりまはす風を止めなければならぬ。私なども元はさうして居たのだが、たゞ貪つて數ばかり多く集めて見ても、人生の用途からいふと實は價值が低い。凝るといふ形だけでは何やら學者臭いが、僅かな仲間が感心する位がせいぜいで、結局は自分も處理に困つてしまふことは、繪馬や玩具を集める人も異なる所が無いのである。しかし幸ひなことには傳説は始めにも申した如く、採集を重ねて居るうちには遠方の類似がわかる。我土地唯一つで無いと理窟に合はぬ口碑が、遠近に兩手の指を屈めても足らぬほどあつて、是には何か別のわけがあらうといふことに心づかせる。即ち自分から進んで研究しようとはせずとも、向ふが自然に訓へてくれる場合も多いのである。之に反してなまじひに小さな有りふれた目的を抱いて、研究に取掛る者は却つて始末が悪い。

傳説がどうして此様に數多く、日本に現存して居るかを説かうとしても、單に上代の是を發生せしめた事情、即ち起原ばかりを穿鑿してゐては、物知りにはなるか知らぬが解説者にはなり得ない。それが我々の大いなる群島の内に、次々新陳代謝し蔓延し錯綜して、終に今日の世相を構成するに至つた、經過こそは大切な知識なのである。起りを調べてそれで満足するのは、昔からの史學の弊といつてもよく、其後の變遷を詳かにせぬ故に、折角の物知りが目前の用には立たぬのである。そんな事をしたくはない國の人々も、斯ういふ研究の資料が無くては企てゝも無駄であり、それが又開け過ぎた多くの文明國の一般の數きでもある。日本には幸ひにしてまだ其資料は豊かだ。豊前はさういふ中でも殊に重要な多くのものをしまひ込んで、まだ明けて見ない寶庫であるらしく見える。其まん中に起つた小倉の郷土會が、無爲にして歳月を徒費せられるやうなことは、假にいたくても到底不可能なことだと、私は牢く信じて居るのである。

(昭和十一年四月十七日)

「旅と傳説」について

この雑誌の如く、初號から終刊まで十六ヶ年以上、一月も抜かさずに讀通したものは私にも他には無い。もう四五年も前から、編輯者の萩原君に向つて、君も一人前は十分働いて居る。もう何時中止しても、薄志弱行と言はないよ、と言つて居たのも私であるが、さて愈々罷めたとなると、何か手の物を失つたやうに寂しい。

改めてもう一度、初めから讀み返して見たい氣がする。公平に批判してどの部分が、一ばん後世に役立つ仕事だつたかを、考へ且つ説いて見たくもなる。私の處にはもう主要記事の索引も出來て居るのだが、この判定は實はさう容易な業では無い。しかし先づ大まか

に考へて、婚禮誕生葬祭その他の特輯號を出し、又昔話號を二度まで出した頃などが、全盛期だつたと言へるかもしれない。こんなにまで多數の同志があつたかと、驚くほどの人が全国の各地から、何れも好意づくだけでよい原稿を寄せ、所謂陣容を輝かしてくれたのみならず、此時を境にそれ〴〵の問題に對する理解常識が、目に見えて躍進したので、之を讀んで居ない人の云ふことが、あれから以後は何だかたより無いものゝやうに感じられるやうになつた。つまりは民俗資料といふものは、集めて比較をして見なければ價値が無いといふことを、實地に證明してくれたのである。

その以外に今一つ承認しなければならぬことは、萩原君は故郷の奄美大島の爲に、この雑誌を通して中々よく働いて居る。それには同郷知友の共鳴支援といふことも條件ではあつたが、とにかくに全十六巻を通じて、奄美大島に關する報告は多く、又清新な第一次の資料が多かつたことは争へない。その一つの例として手近に私の心づいたことをあげる。と、第一巻のたしか二號か三號に、島の先輩の露西亞學者昇曙夢さんが、アモレヲナグ即

ち天降女人の事を書いて、我々に大きな印象を與へ、又より多くを知りたがらせて居たのだが、それが約十六年を隔て、最終號の中に、今度は金久正君といふ若い同志が、それを詳しく書いて我々の渴望を醫して居る。もう「旅と傳説」さへ大切に保存して置けばこの世界的興味のある一問題は、永久に學問の領分からは消えないのである。或はそれほど大きな問題だと思はぬであらう人たちの爲に、出来るだけ簡単に前後二ヶ所に出て居る天降女人の事を書き傳へ、出来るならば此上にももつと豊富な資料の、集まつて來る機縁を促したい。

人も知る如くアモリは古語であつて、天より美しい女性が降つて人の妻となつたといふ話は、日本の本土にも沖繩の島にも、又遠近の諸外國にも弘く分布して居る。私たちの仲間では是に天人女房といふ名を付與し、主として昔話即ち民間口承の文藝として之を記憶して居るのだが、稀にはまだ傳説、即ち會て大昔にあつた事蹟として、信じ傳へたものもあるのである。

奄美大島の方にも之を昔話とし、又傳説としてもつて居ることは他と同じだが、珍らしいことにはそれを實存の恠異、今でもさういふ名の女性が何處かに居るものとして、折々は世間話の中に現はれて来る。即ち其女に出逢つて誘惑せられ、ひどい目を見たといふ若者があるといふことを、夙く昇曙夢さんが語つて居られるのである。この點は西洋で、昔話の別名にもなつて居るフェアリーといふ者がやゝ之に近い。即ち盛んに昔話や、土地の口碑中に、大昔あつたこととして傳へられる一方に、今なほ邊陲の古風な男女の中には、之に出逢つた又はいぢめられたといふことを、まじめに吹聴する者が多いことは是も一つだが、たゞ其方は話をまに受けて聽く人の癖、それに基づく一種の幻覺の類と、今までは簡単に片付けられて、第二、第三の原因までは、考へようとする者が無かつたのである。ところが大島の天降女人のみは、成程と心づくやうなことが別に見つかつた。其實例を金久正君が幾つも擧げて居る。若い男たちが淋しい山路などで出逢つて、騙され誘惑されたといふアモレヲナグには、大體に思ひ當るやうな共通の型があるのださうである。無論目

の醒めるやうな美しい女で、それが白い風呂敷の包みを背に負ひ、着物の左襟を手に取り又は帯に挟み、下裳をちらつかせた艶かしい姿で、多くは村と村の堺の長根の辻などでたつた一人行き逢ふ。或は谷間に下り清水のある處に近よると、そこにヌブ（柄杓）を手にもつて水を汲み上げて居る女が居て、それが裸形の水を浴びる姿であり、又は髪を洗ふ處であつたりする。この二つは大島の人たちに、深い説明が無くても大よそわかる人體で、一つは近い世まで島中をあるいて居た遊女の姿、他の一つは巫女の始めて成道するときの行事であつたといふ。

遊女と巫女とは近世では二つ異なる職業であつたけれども、前者をサカシとも謂つて居た一事が、系統のもと一つであつたことを考へさせる。さうして本土の中世の遊女も同じやうに、こゝでも人に近よる表の藝は歌と語りものであつたのである。巫女の普通の人から畏れ氣味悪るがられて居ることは、島の方でもかはりは無いのだが、彼等も年功を経て一派の頭となるまでには、やはり久しい修業時代があり、それが又少なくとも歌舞の生活と

因みがあつた。即ちこの山中の女性を、又はハゴロモマンチとも謂ふ名があるやうに、もと此昔語りを説く役は右にいふ二種の職業婦人に限られ、それも恐らくは、甲から乙を承け繼がれて、近世に達したのかと思はれる。是が説話の主人公の品性をまで、斯様に零落させた例は他では聴かぬが、前から我々の注意して居た小野小町や和泉式部、大磯の虎御前や八百歳の比丘尼などの、諸國數十の場所に遺跡をとゞめ、もしくは實際に語りものの中に語るやうな事跡を、その行く先々の土地でしたやうに信じられて居たのは、やはり傳承者と語らるゝ人との混同であり、それも曾つては一人稱を以て、語つて居たことの名残らしく考へられるのである。

奄美大島といふところは、私の知る限りでも、内部歴史の珍らしく豊かな島であつた。書いた記録といふものは僅かしか残らぬが、近い百年二百年の間にも避ければ避けたかつた實に色々な経験をしてゐる。さうして全體に今は古い拘束から解き放たれて、新時代のあらゆる機會を利用し、すぐれた人物が輩出して居るのである。住民自身としては忘れた

方がよいやうな、外の者からは是非参考の爲に聽いて置きたいやうな、無数の思ひ出をかかへて、まだ其處理を付けずに居るといふ感じがある。此數からいふと、萩原君の如き人がもつと辛抱強く、古い埋もれたことを尋ね出さうとする知友を糾合して居てくれたらと思はずには居られぬのだが、それをもう謂つて見てもし方が無い。それよりも雑誌をその時々慰みなどは考へずに、いつまでも之を精讀する者の、是から日本にも多くなるやうに、我々もどうかして残るやうな雑誌を作つて行きたい。

(昭和十九年三月民間傳承)

索引

引

ア

安居院の神道集
 朝日長者
 足形清水
 「吾妻鏡」
 鮑
 雨乞
 アマノシヤク
 雨夜王子

索引

二二
 一七
 三三
 一七、二〇九
 三三
 三三、三三
 七
 三六

アモリ
 天降女人
 アモレヲナグ
 歩行神子(アルキミコ)
 イ
 遊女
 幽霊
 生霊と死霊
 生性

二八五

二六
 二〇
 二七
 二四
 二九
 二九
 二九
 二九

索引

石の傳説 二八六
 伊勢の齋宮 三三〇
 「一休諸國咄」 二二
 和泉式部 五、二二、六
 泉と神様 二二三
 犬を飼はない 一三三
 今西龍 九
 ウ
 氏神 九
 歌物語 一六、一八、五五、五九、二二
 ウツボ 三三
 靱猿 三三
 宇津保 三三
 ウツボ屋 三三

二八六

産湯の口碑 三二
 馬方 三二六
 馬の祈禱 三三六
 厩安全の祈禱 三三
 卜方(ウラカタ) 一八七
 浦島子の玉手箱 三三三
 ウンカの神 一六九
 「雲陽實記」 一四〇
 エ
 英雄傳説 四九、七三
 謡曲八島 一〇三
 疫病神 一六九
 「江戸名所記」 二九
 縁起 三

オ

御大師水 五〇
 御旅所 三三
 鬼塚 三三
 「鬼と神力坊」 三三
 笈掛石 三三
 笈掛杉 三三
 御百度 三三
 大磯の虎 三三、二六
 大田蜀山 六〇
 太田道灌 四七、三〇七
 大人 三三
 大男 三三
 面影橋 三三

カ

開墾者 二二
 「河海抄」 三三
 赫奕媛系の舊話 三三
 幽界との交通 三三
 瘡薬師 三三
 片目の魚 二四
 片目の蛇 九
 語りもの 二八
 河童 三三、三三、三七
 河童の御祭 三三
 河原者 三三
 甲賀三郎の物語 二二
 神實(カミザネ) 三三

索引

二八七

神の御子
神田明神

三九
三九

キ・キ

胡瓜

三三

「義經記」

一〇七

儀式上の神領

四

貴人の御遺跡

三六

木地作り

三五

木の傳説

九

騎馬うつぼ

三三

京良木

六

記録文學の干渉

三〇三

祇園の祭

三三

ク・ク

九十九王子

四

口寄せ

一〇四

口寄せ神子

一〇五

クドキ

二

「九戸軍談記」

三六、一四

クボ

三〇九

供養塔

三五

「臥雲日件録」

三三

「群書類從」

三

ケ・ゲ

教來石

六

「元亨釋書」

三

コ・コ

固有名詞の類似

三六

弘法大師

三〇一、三七、三九

弘法水

四

弘法井戸

四

口碑

三、三〇

弘文天皇

五

「古事談」

三四

諺(コトワザ)

六

強清水の傳説

三五

護法實

一八四

コホロギ橋

四

小松といふ苗字

三六

御陵墓傳説地

四

惟喬親王
婚禮

三五
三六

サ・ザ

葬祭

三六

サカン

三六

坂上將軍利仁

五

鑿泉の技術

三〇八

細語(ササヤキ)の橋

五

座頭

四、三六

猿の皮の鞆

三四

「參宮名所圖會」

一八

「讚州高松叢誌」

一四一

山路の笛

五

山王權現

三九

シ・ジ

- 思案橋
- 十三塚
- 「常山紀談」
- 聖德太子
- 社寺の縁起
- 「諸社根元記」
- 白旗松
- 白羽の矢
- 驗(シルシ)の矢
- 白丸石
- 神語記録
- 「新續古事談」
- 「神體記」

- 四
- 三四
- 一三〇
- 三五
- 三〇
- 二二
- 一七
- 一七
- 三三
- 一八
- 一四〇
- 二九

- 神態記録
- 神體の漂着
- 人文地理の研究
- 「新篇武藏風土記」
- 神木
- 神話

ス

- 委見橋
- スクモ塚
- 「諏訪大明神畫詞」
- 水神祭
- 水部傳説
- 「醉迷餘録」

- 二九〇
- 一八
- 三八
- 二二
- 六、一七、一七
- 七
- 三
- 一
- 一
- 一
- 三、一
- 一

セ

- 成功譚
- 「勢州軍記」
- 「醒睡笑」
- 聖母マリヤ
- 小兒の魂
- 世間話
- 「世田谷舊記」
- ソ・ソ
- 曾我兄弟の傳説
- 「曾我物語」
- 「俗説辯」
- 蘇民巨旦の兄弟

- 一〇
- 一九
- 二二
- 二三
- 三五
- 三、三〇
- 三五
- 三
- 一
- 一
- 二四
- 二九

タ・タ

- 大黒祭
- 大子といふ巡遊神
- 大多羅坊(ダイダラ坊)
- 大太法師
- 泰澄大師
- 「太平記」
- 當道の由來
- 田神祭
- 竹の産地
- 竹を煮て食ふ
- 豎井戸
- 玉手箱
- 多摩の横山

- 二九
- 二二
- 五、三
- 五
- 三〇、三
- 九
- 二
- 一〇
- 一
- 一
- 二
- 二
- 二九
- 二九
- 二九

魂宮 三六、三八、三三

「丹後古事記」

誕生 三〇

誕生井 三六

「丹南文書」 三三

チ

地下水の露頭 三〇九、三二八、三三

「筑前續風土記」 三三

地名起原 八三、六

地名の數量 八三

長者屋敷 四五、一〇〇

鎮魂の祭 三六

ツ

塚の傳説 三

槻の木 一七

坪井正五郎 三三

杖立傳説 三〇

テ・デ

天譴神話 三

傳承者 三三

天神 三〇

「傳説叢書」 三

傳説と習俗との關係 一九〇

傳説と歴史 三〇

傳説の意識的改作 三六

傳説の運搬者 一〇、一六

傳説の起源 七〇、一〇、三〇

傳説の共信圈 一九

傳説の形式 三〇

傳説の研究 三四

傳説の採集 八九

傳説の需要 六一

傳説の盛衰 元

傳説の成長 二四、三三、三七

傳説の對象 六

傳説の中心 九

傳説の發生地 二〇

傳説の分布 六

傳説の保存 四

傳説のモチーフ 三

傳説發生の年代 二八

索引

傳説目錄 一九

天人女房 三〇

天然傳説 三四

天皇の御遺跡 八九

ト・ド

童話 元

蟲き橋 二四、三三、三七

唱へ言 六

虎御前 九

鳥居木 二〇

ナ

鳴かぬ蛙 四

長根の辻 三

三

三九

三〇

三六

三〇

三六

三〇

三六

三〇

三六

三〇

三六

三〇

謎言葉

七不思議

「南方紀傳」

二

遁げ水

「二十四所巡拜圖會」

日本人の命名法

「日本傳説集」

二本松・三本杉

人聞菩薩(仁聞菩薩)

又

糠塚

ヌブ(柄杓)

八 九 一元

ネ

彌武利の衆

「年中行事秘抄」

念佛宗門の流布

念佛團體

ノ

「後鑑」

野大坪の萬歳

笹宮(ノノミヤ)權現

賭弓

ハ

放生會

一元 二元 三元

三元

三元

一元

一元

二元

ヒ・ビ

比丘尼

比佐古

火雨塚

「常陸風土記」

一鎌竹

火の見梯子

「備後風土記」の逸文

フ・ブ

フェアリー

歩射(ブシヤ)

二股竹の奇瑞

「豊後傳説集」

一元 二元 三元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

「邦内郷村志」

白米城の傳説

峽田(ハケタ)

箱の神

箱の使用

箱明神

ハゴロモマンヂヨ

橋占

旗洗ひの池

旗掛櫻

八幡宮

八幡太郎

ハナシといふ名詞

法師修驗者

「播磨風土記」

二元 三元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

二元

平家谷

平家谷の傳説

「平家物語」

蛇の掣の話

ホ・ボ

「豐薩軍記」

「封内風土記」

ト占祈禱の術

ホコラ

時鳥の傳説

掘兼の井

盆踊

戌

盆踊の歌

マ

申し子

マウチギミ

祭の歌

祭の式場

まぶひ込め

ミ

ミカノハラ

御櫛笥

巫女

巫女の故郷

御正體

三二

三六

九

一八

三六

三六

三九

三三

三二

一〇九

三七

味噌五郎

御手洗の池

水の神

水の神の信仰

「箕輪軍記」

三穂太郎

御葭神事

民間口承

民間説話

民俗學の歴史

民俗資料

ム

昔話

武藏七黨

索引

武藏坊辨慶

メ

苗字

女夫木

モ

モツク

百手

ヤ

養老の籠

焼米

矢指塚

矢指といふ地名

五

六 七

三九

一八、一九

三五

九九、一〇、二八、三三、四三

四

一七

ヤツ

山争ひ譚

日本武尊

山男山姥

ユ

弓祈禱

百合若大臣

ヨ

用語の時代色

用明天皇

夜啼き

呼名の恠

三〇九

七

一七三

三三三

ラ

老女の告げ口

落語

レ

靈魂の運搬

靈地

歴史教育

連理木

ロ

籠城

輓轡師

三三三

三三三

二〇八

六二

三五

ワ

王子神

王子社

若宮

渡守

キ

「遺老説傳」

エ

越後の七不思議

越前萬歳

烏帽子岩

五、三三

四

三三

三六

一八九

五〇

三四

七

ヲ

尾崎紅葉

小野といふ苗字

小野小町

怨念物

六

三七一

五、三六、六二

一〇三

本書の原本は三元社版昭和十七年十月二十日發行「木思石語」初版を使用した。但し「傳説と習俗二」一篇を省き、新に「うつぼと水の神」「旅と傳説について」の二篇並に索引を加へた。

刊行の言葉

こゝに柳田國男先生著作集を世に送るにあつて一言刊行の趣旨を述べて置く。日本に民俗學の研究が興つて以來四十年、先生はこの學問の樹立者指導者として或は著述に或は講演に、又直接門下の教導に寧日なき有様であつた。加ふるに民俗探訪の足跡は全國に遍く、山間の僻村洋上の離島に至るまでその見聞の精涉誠に掌を指すが如くである。民俗學の研究に志す者はもとより本邦文化史に思ひを寄する者、先づ先生の業績をたづねるは今日の常識である。然るに先生の論文著作はその數頗る多く而も容易に入手し難い。我等これを遺憾とし先生に乞うてその代表作をまとめて一望の下に公けんとす。幸ひに先生にはこの計畫を賛せられ此處に刊行の運びとなつたことを喜びとする。本著作集に取扱はれたる問題は廣範にして多岐、盡く在來史學の空白として残されし分野に研究の歩を進め獨創の見を立てられたものである。衣食住、村落と家、冠婚葬祭、國民信仰、年中行事、婦人の生活口承文藝、國語問題などいづれもその豊富なる資料を全國に互る比較研究の下に來たし、ことさらに斷定を避けてこれを將來の研究に俟たれてゐる。我が日本の歴史が新らしき展開を告げんとするに際して我々は先づ常民の歴史を尋ねその將來の動向を決定せねばならない。學問の自由と率直なる批判の許されたる今日凡ゆる研究が精確なる事實の認識を出發點とせねばならない。この意味に於て本著作集の持つ意義は多言を要せざる處である。江湖の精讀を希望する次第である。たゞ現下出版界の惡條件は到底これを我々の理想とする形式の下に出版するを許さず、可能なる限りの努力を以て満足するの外なきことである。讀者これを諒とせられたい。終りに臨み本計畫に援助を惜まざりし出版社各位に對し深甚の謝意を表するものである。(昭和二十二年三月 柳田國男先生著作集刊行會)

柳田國男先生著作集

第一冊	山の人生	初版五十圓
第二冊	地名の研究	再版百二十圓
第三冊	信州隨筆	初版百圓(品切)
第四冊	時代ト農政	初版百二十圓
第五冊	木思石語	初版百八十圓
第六冊	北國紀行	近刊
第七冊	女性と民間傳承	續刊
第八冊	退讀書曆	
第九冊	續退讀書曆	
以下續刊		

柳田國男先生著作集 第五冊

木思石語

昭和二十三年九月十日發行

定價百八十圓

著者 柳田國男

發行者 梅山 紘

發行所 實業之日本社

東京都中央區銀座西一ノ三
電話京橋五二二一—五
會員番條A—一〇〇八

印刷所 大日本印刷株式會社

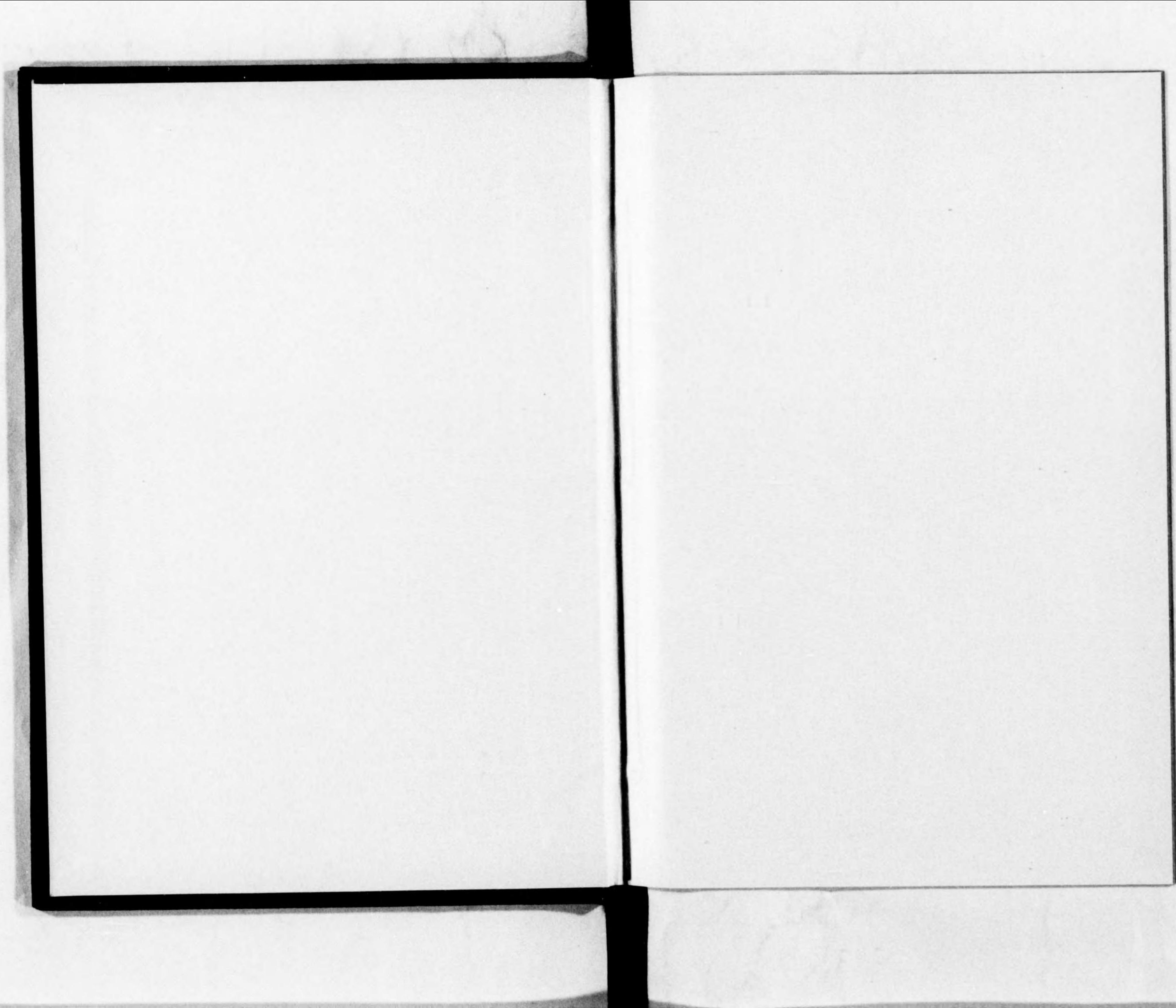
表紙 小倉印刷所

製本所 小原製本所

配給元 日本出版配給株式會社



4T131



終